NMNMNMN

飯野ビル全景

ビル正面入口から受付フロアまでの
直通エスカレーター

＊＊＊　2014年度新年賀詞交歓会の御案内　＊＊＊

恒例の新年賀詞交歓会を下記要領にて開催いたします。

昨年に引き続き、**双日㈱の本社（飯野ビルディング）**で行います。
昨年不参加の方々には本社ビル視察の良い機会になることでしょう。
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

開 催 日　：　2014年 1 月 17 日（金）12：00～　（開場は11：30～）

会　　場　：　双日株式会社・本社21階　大会議室
（2124, 2125. 2126, 2127会議室）
所番地――千代田区内幸町２－１－１　飯野ビルディング　内

アクセス　：　＊　メトロ千代田線・丸ノ内線「霞ヶ関」下車、出口C3
＊　メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口９

会　　費　：　無　料　（軽食、飲物を用意致します。）

特記事項（大切です！）

このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード**というものが必要です。
ゲート（一種の改札口）を通るには、**必ず入館カードを使います。**
このカードは、お帰りの時も使いますので、失くさぬよう御注意下さい。
ゲート出入りの要領は、SUICAやPASMOの使い方と全く同じです。

① この頁は、入館カード入手のための引換券兼用としています。
新年会参加の方は、**下の枠の中に氏名を記入の上、この頁を切り取って持参して下さい。**
② 当日は、ビル3階の双日㈱の受付近辺にいる社友会の世話人にこの引換券を渡し、入館カードをお受け取り下さい。11時半から12時正午までの間は、3階オフィスロビー及び受付の横に社友会世話人が控えております。
万一、12時以降にお着きになった場合には、双日㈱の受付嬢が対応致します。
（3階受付までは、ビル1階の正面入口から直通エスカレーターをご利用下さい。）

入館カード　引換券	
ニチメン東京社友会 会　員	氏　名

＊　その他お問い合わせは会報末尾の「世話人一覧表」記載の世話人にお寄せ下さい。
FAX：03-6858-7216,　Eメール：menkwa@sojitz.com　（以上）

双日㈱　オフィス　周辺の案内図

〒100-8691　千代田区内幸町２－１－１　飯野ビルディング

地下鉄アクセス

メトロ千代田線・丸ノ内線「霞ヶ関」下車、出口C3

メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9

2013年度社友会総会　挨拶

会長　河　西　良　治

本日は梅雨明けの猛暑の中、ニチメンOBの方々がこのように多数ご参集戴きまして厚く御礼申し上げます。

また双日よりは超ご多忙の折にも拘わらず佐藤社長以下役員の皆さまがいつものように御親切にご出席賜りまして感謝の極みでございます。

さて早速ではございますがこの総会を機に私の一身上の都合によりまして会長を辞任させて頂く事に致しました、副会長を二年、会長を三年務めさせて頂きましたがその間の会員の皆様のご支持と双日様の物心両面に亘る絶大なるご支援を戴いて何とか無事に任務を全う出来ました事に対しまして茲に改めて心より厚く御礼申し上げます。

又当会の運営に日々心血を注いでくれて居る16名のサムライ世話人及び監事役の皆様に改めてその絶大なるバックアップに心より厚く御礼申し上げたいと存じます。

私の後任の会長には島崎副会長が就任頂く事になっていりますのでどうぞ皆様今後とも宜しくお願い申し上げます。

世界は正に躍動するグローバリゼーションの真っただ中にあり、この地球は強烈な勢いでEXPANDしており総合商社双日のPOTENTIALITYは正に無限であります。

それではご列席の会員の皆様の益々のご健勝と双日の限りなきグローバルな大発展を心より祈念申し上げて、私の辞任のご挨拶とさせて頂きます、どうも有難うございました。

最後に皆様にいつもご協力を戴いて居ります東日本大災害に対する“あしなが育英会”の募金箱に是非可能な限りのご協力をお願い致します。

有難うございました。

2013年度社友会総会　挨拶

新会長　島　崎　京　一

皆さん、暑いなか、総会に参加戴き有難うございます。

只今河西会長よりお話がありました様に、河西会長の退任に伴い、副会長の私が、会長職を引き継ぐことになりました。

私も八十歳を超え、体力的に自身が持てないので、一緒に副会長を退任したいと、世話人会で強く申上げたのですが、「後任人事を決めないで、二人が一緒に退任するのは、あと混乱するばかりである」と云う意見が強く、また河西会長からも強く要請されましたので、これは引受けざるを得ないと判断しました。

これから一年間かけて、世話人のみなさんと充分相談しながら後継人事の方向性をつけ度いと思っています。

ニチメン東京社友会が設立されて丸7年となりますが、設立以来の世話人の皆さんの努力で、ここまで立派な組織となりました。従って、これは出来るだけ長く活動できるようにしなければなりません。

今日お集まりの皆さんは大変なニチメンファンであり、ニチメン大好き人間でしょう。

私も全くその一人であり、ニチメンの最も元気のよかった時代、昭和30年― 40年代に物産や商事にも敗けないぞの気概で、新しい商売の開拓に全員で頑張ったのを懐かしく思い出します。

又、いい仕事をしたら、軍隊経験のある上司、先輩から「よくやった」今日は飲みに行こうと云って、後ろから背中を押して呉れました。

後半元気がなくなり、もたもたしたのは誠に残念ですが、ニチメンはそう云ういい所を沢山持っていた、素晴しい会社でした。

こうした懐かしい、いい思い出も皆さんと共有しながら、これからもやって行きたいと思っておりますので、皆さんのご協力を是非とも宜しくお願い致します。

今日は双日の佐藤社長以下、多数の役員も皆様のご出席戴いていますが、このニチメン社友会をこれからもご支援戴きたくお願い申し上げて、私の挨拶と致します。

2013年度総会　来賓ご挨拶

双日株式会社代表取締役社長　佐　藤　洋　二

皆様、今日は。双日の社長、佐藤洋二でございます。

今年も約150名の方々がこの会に参加されるとお聞き及びましたが、大変盛大な会が毎年続いており大変喜ばしく思っております。

先程、河西会長が今回を以って退任されるとお聞きし、些かびっくり致しました。河西会長と島崎副会長には折につけ色々ご相談をし、また会社にもお越し下さり懇意にして頂いておりますが、河西会長とは会長を退かれた後も、親しくお付き合いさせて頂ければと存じております。

さて私は社長に就任して丁度一年が過ぎ、先日の6月25日が2回目の株主総会となりました。今年の株主総会には、会員の方々にもご来場賜り、また、議決権の行使に当たっても大変なご協力を頂きました。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。お陰様で何とか無事に株主総会を乗り切ることが出来ました。

会社の状況につきまして少しお話させて頂きます。”Change for Challenge”という3ヶ年の中期経営計画を立て、その初年度を去年の4月から始めましたが、2013年3月期の決算においては、当初予定していた当期純利益200億円には届かず、143億円という少々残念な結果となりました。

これは、ひとえに私共の計画の立て方に問題があったのでしょうが、経済環境と致しましては、エネルギー・金属セグメントにおいて市況の影響を大きく受け、特に中国の景気の減退による影響を一番大きく受けてしまいました。中国関係で潤っていた金属・資源関係、鉄、合金鉄、石炭、その他のところで、期初に予定していた市況に届かないことが期の後半に明らかになり、大きく崩れてしまったというのが主な要因です。

また、石油の生産も、新規生産井の掘削遅れ等があり、残念ながら計画レベルには到達しませんでした。市況については相変わらず低迷して行くと考えておりますが、石油生産の方は修理も無事済みまして、この6月には全て新しい石油井から生産を開始したと聞いております。

このような事情はございますが、私共は今回の中期経営計画において、最終年度には従来の日本会計基準でいうところの経常利益750億円を出し、当期純利益450億円を稼ぎ出すという計画を立てました。私共は強固かつ一定の環境変化にも耐えられる財務基盤の確立を目指し従来頑張ってきましたが、これに加え、収益基盤を強固なものにすることを最後の仕上げとする、という思いを込め、収益力の強化と企業価値の向上という二つの大きな目標に掲げて、この3ヶ年計画を作りました。

初年度は残念ながら計画値に到達しませんでしたが、我々が目指す最終年度の経常利益750億円、当期純利益450億円という旗は降ろしません。例え一年遅れてもやり通す、という決意でおりますが、これは数字そのものよりも、かかる数字を実現した暁には、我々の環境が好転するという意味合いがございます。色々な意味で、この750億円を達成してゆく力が出た時には、我社を取り巻く環境が極めて良好なものになることを信じ、この計画を作りました。従い、この計画が例え一年遅れようと是非ともやるのだという決意で皆がいるわけです。初年度の出足は残念でしたが、2年度目以降につきましては、しっかりと環境の変化を織り込んで目標に向かって進んで行けるよう、新たな事業の再構築と調整を行いながら現在の経営を進めておりますので、引き続きご支援を賜りたいと思います。

かかる環境の中、私共は株主の皆様に対する思いを多少なりとも改善してゆく、という決意の表れと致しまして、僅かではございますが、配当の1円増配を今期実行することを発表させていただきました。昨今の

経済環境、会社の状況については、先程の株主総会でもご質問を賜わりましたが、株主の皆様からは非常に温かいご支援のご質問が多かった、と感じております。株主総会を終え新たに今の私共があるわけですが、次に今年のハイライトをご紹介差し上げたいと思います。

安倍首相は日露首脳会談出席のため、先般のゴールデンウィークにロシアを訪問しましたが、その折り経済ミッションの一員として、私とここにおります段谷副社長も同行し、「ロシアに於ける日露の今後」という会合に参加させて頂きました。ロシア側も本気だなと感じるものが幾つかございました。東の隣国としての日本に対し舵を切ってゆく、という極めて強いメッセージがロシアから出されたと感じております。私共が向こうでMOU（覚書）を協議した案件が幾つかあり、実は二つの MOU（覚書） にサインをして帰国しましたが、そのうちの１件は既に発注され、ロシアとしては珍しく素早い動きであり、我々の実務に繋がっております。今後、このような官民挙げての活動は、私共の営みとしてこれからの商活動に加えて行ければと思っております。

今一つは、現在ブームとなり非常に大きな話題になっているミャンマーですが、この国については、加瀬会長が安倍首相に同行し訪問しております。ミャンマー側の要求というものも色々ありますが、私共は積極的に関与して参りたいと考えております。思い起こしますと、このミャンマーという国と私共とは古いお付き合いがあります。1918年、この年を憶えている方もおられると思いますが、日本綿花がビルマ産の綿花を日本に初めて輸入したのが1918年であり、これが私共とビルマとの初めてのお付き合いです。翌年の1919年には縫製工場を買収、続く1920年には精米工場を買収する、という活動を続けて、諸先輩方は矢継ぎ早にミャンマー、当時のビルマに対する経済活動を実行されました。戦後につきましても、1956年には水力発電の建設に関わる支援を行うなど、ニチメン（旧日本綿花）の活躍については極めて大きなものがあったと推測できます。

このような活動や思いというものは、今の双日でも企業理念の中で取り込み、引き継いでゆきたいと思っております。私共の企業理念は、少し長くなりますが引用しますと、『双日グループは、誠実な心で、世界の経済や文化、人々の心を結び、新たな豊かさを築きつづけます。』というもので、これを双日の企業理念として明文化しております。海外に於いて商社が果たすべき活動の理念については、先輩諸氏が遺して下さった数々の足跡を、そしてその思いを、是非企業理念の中で今後も引き継いでいきたいと考えております。

特にミャンマーでは民主化が始まっており、これから益々ミャンマーに対する経済活動が活発になってゆくでしょうが、先程申しました通り、先輩諸氏が築いて下さった様々な商材や取引先との関係が今でも残っております。私共の社員がミャンマーに行くと、皆さんはその親日性に打たれて、ミャンマーが好きになって帰って来る、という事例が多いそうでございます。

最後にご報告しますが、双日ではこの4月1日から「西日本・東アジア構想」を発足させ、新たな取り組みを始めました。これは「西日本」と「東アジア」をひと括りの地域として管理し、また、この地域を一つのテリトリーとして管轄してもらう方を指名し、我々はここを攻めて行くのだということを明らかにしたものです。この組織は、今ここにおられる原副会長をトップとし、大村理事や前アジア・大洋州総支配人の池田顧問を担当として指名し、その他に様々なスタッフを次々と増員しております。

先ずは関西地区のお取引先を回り、関西地区の方々が世界に羽ばたく為のお手伝いをしたいと思っております。勿論これは輸出取引だけではなく、グローバルな形でのお付き合いを進めるためのもので、双日の機能を是非とも果たしてゆきたいと思います。

これは是非そうなって欲しいと思うのですが、ゆくゆくはもう一度大阪に支社を、我々の出身地域であります関西地区に新たに大きな拠点を作ってゆきたいという思いが、この中に秘められています。従い、この構想は是非とも失敗することなく、関西地区との取り組みを進めることにより、旧ニチメン、旧日商岩井の出身地域の基盤にもういちど楔を打ち込み、新たな展開が出来ればと思っております。

最後になりましたが、ニチメン東京社友会の益々のご発展と、本日ご列席の皆々様のご健康を祈念致しまして、私のご挨拶とさせていただきます。

どうも有り難うございました。

第８回ニチメン東京社友会総会・懇親会　開催報告

世話人　　長 谷 川　　洋

2013年７月11日、打ち続く猛暑と時には豪雨という厳しい気象条件下で、会員の皆様の御出席が案じられていたが、いざふたを開けると、開場30分前から続々とお懐かしい 顔、顔が次々に現われ、ついには100名を越え、最終的には、双日よりの御来賓を入れると約150名がご参加。
会場は、恒例の一橋如水会館。開宴前から既に彼方此方にさんざめく歓談の輪が出来た。

12：00総会開始の合図。総合司会は病欠の倉又則夫代表世話人に代わって長谷川洋世話人がが務めた。先ず冒頭に物故者に対して全員で黙祷を捧げた。

そして以下の式次第で総会は進む。

1. 河西良治会長挨拶　；　双日㈱よりの会場提供その他の便宜供与に対して謝意を述べられ、双日の益々の発展を祈念した。
   そしてこの総会を期して、社友会会長職を勇退し、後任に島崎京一副会長を推挙した。
   役員・世話人会ですでに承認済み人事ゆえ、そのまま承認・採択された。
2. 次期会長　島崎京一副会長の挨拶。
3. 前年度事業・会計報告　；　桝山俊次世話人
4. 同監査報告　；　中原正紀監事
5. 当年度事業計画および予算案承認　；　桝山世話人
6. 来賓の双日㈱代表取締役社長の佐藤洋二氏の御挨拶。
   双日の過去の業績にも触れ、現況および未来への展望、意気込みを懇切丁寧にかつ綿密にお話しされた。

以上にて、総会式次第を完了し、第二部、懇親会に移る。
いまやレギュラーＭＣとしてすっかり定着した浜口信恭世話人が登場する。

1. 先ずは“乾杯の儀”；　石澤謙一さん（機友会会長）による“乾杯”で一挙にリラックス・ムードに入る。いつもながらの如水会館の料理も美味である。

2. 今年は会場に歌舞音曲も特別のイベントもなく、和やかな歓談の場となった。
   あの日から、もう何十年だろうか、かつての元気印のあの人も、この人もすっかり白頭翁になっている。私は誰でしょう、のような方も居られた。

3. 時間はあっという間に過ぎ、“中締め”役に中原監事が登場す。
   お名残り惜しいが、また会う日まで元気で、と一本締め。

明日からまた　事故にも遭わず、伝染病にも罹らずに、転んで骨折などせずに、また通り魔に襲われることもなく、息災に生き抜いて、皆様にお会いできることを祈念しています。

◎ 2013年7月11日（木）開催 総会・懇親会出席者一覧

［50音順、敬称略］

［会員］

ア
浅井彦道
朝倉正治
浅子重子
東豊廣
甘信雄
荒木武格
池田浩
池永保
石川博一
石澤謙清
石原従
井田正夫
今村隆昭
岩田英明
上野通長
宇津木弘三
浦谷克利
大北海生
大久保静子
大塚勇
大西悦良
大野久生
大野栗雄
大平啓作
大森弘雄
大山岩男
岡島隆茂
岡田睦彦
沖田郁夫
奥村良治
河西正彦
河西泰司
数森勲
勝田巳
川西緒子＊
川畑奈徳
木津雄雄
喜多嶋次彌
倉持久勝
栗田重幸
小西靖造
小林富伸
斎枝穣
三女治
五月井啓司
坂井良一
坂井潤三
桜井悦雄
佐藤鐵次
佐藤統美
佐藤一克
三分

シ
篠塚美郷
柴田実
渋谷義
島崎京一
清水武人
白石哲也
杉浦好治
杉本佳久
須藤忠昭
陶山晃
曽我宏司
園山春一
高尾勝
高木亨一
高木恒久
高瀬允宏
高田秀子
竹内可能
田尻眞啓
谷昌興
塚本幸雄
豊間根政行
永井清光
中川十郎
中谷宣英
中原正紀
名島憲一郎
滑川和子＊
成見和男
南部捷郎
西川周
西村照男
西村弘
庭野松三
野本定男
橋口喜郎
長谷川洋
初又惇夫
花澤和郎
埴生榮勇
浜口信恭
林正弘
久本紘一
平尾龍介
廣岡幹雄
廣田雄太郎
廣本昌也
深尾孝
福島有恒
福富直明
福本匡純
古家章
本間登志雄

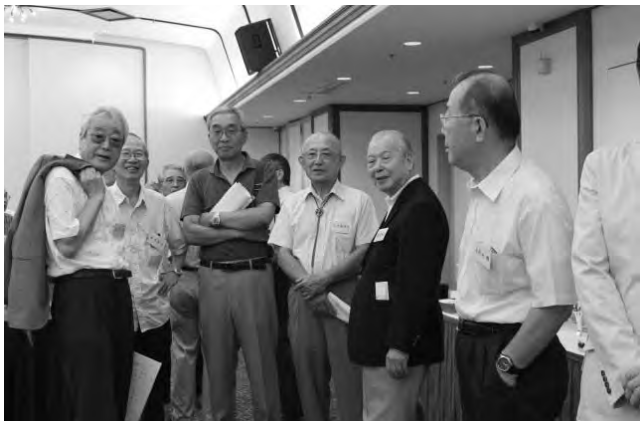
マ
桝潟磐夫
桝山俊次
松尾憲一
松崎利夫
松本忠夫
丸山修作
ミ 溝江博三
宮浦博
ム 村井靖武
モ 望月昌徳
ヤ 矢島孝
山岸正雄
山口一光
山邑陽一
山本浩一郎
ヨ 吉海秀造
吉木健
吉田敬三
吉本邦晴
リ 立古健策

［双日役員等ご来賓］
原大
佐藤洋二
段谷繁樹
谷口真一
茂木良夫
此田哲也
込山雅弘
喜多敏彦
加藤英明
花井正志
田中勤
丸田秀
山田裕
平井龍太郎
高濱悟
伊地知俊一
青木聡弥＊

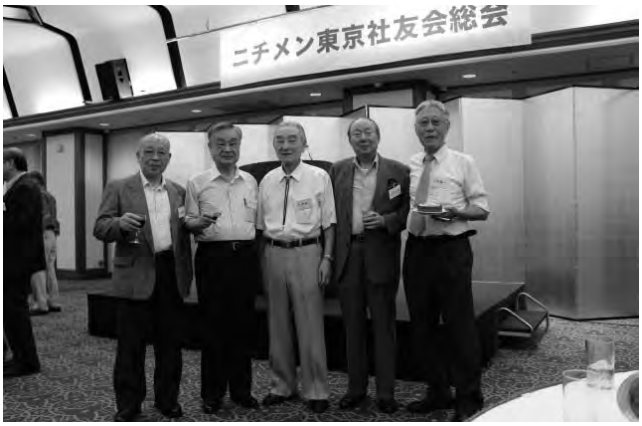
［支援協力者（非会員）］
今井恵子
小堀裕子
増川恵子
六反真智子

出席者合計146名

＊印＝運営に協力頂いた会員



ニチメン東京社友会総会
懇親会風景



2012年度事業報告 及び 収支報告

（期間：2012年７月１日～2013年６月30日）

ニチメン東京社友会

Ⅰ．事業報告

	実績（千円）	予算（千円
第７回　総会・懇親会開催　（2012年７月12日）	７８２	９００
154名　参加		
会報・名簿の発行	９９５	1,０００
13号及び会員名簿　2012年12月15日発行、14号　2013年６月15日発行		
ホームページの運用	２０６	３００
第６回　新年会開催　（2013年１月17日）	５４７	６００
158名参加		
慶弔行事	３４３	３５０
米寿４名の表彰を致しました。		

Ⅱ．収支報告

A）収入の部

１．会　　費	1,６４６	1,７００
２．双日助成金	2,３００	2,３００
３．寄　　付	２１	０
４．そ　の　他	４０	０
合　計	4,００７	4,０００

B）支出の部

１．総会開催	７８２	９００
２．新年会開催	５４７	６００
３．会報・会員名簿の作成	９９５	1,０００
４．ホームページの運用	２０６	３００
５．会員慶弔	３４３	３５０
６．世話人会の運営経費	２５０	３００
７．事務所運営経費	８７３	７５０
８．予備費＋雑費	９７	１００
合　計	4,０９３	4,３００

C）繰越金及び預り金の部

当期収支残高	－８６	－３００
前期繰越金	2,２１９	2,２１９
当期末繰越金残高	2,１３３	1,９１９
次年度以降年会費等	７２４	
双日次年度助成金	５７５	
預り金残高	1,２９９	
合　計	3,４３２	

2013年度事業計画 及び 収支予算

（期間：2013年７月１日～2014年６月30日）

ニチメン東京社友会

Ⅰ．事業計画

	予算（千円）	前期実績（千円）
第８回　総会・懇親会開催　（2013年７月11日）	９００	７８２
会報・名簿の発行	８００	９９５
・会報のみの発行を予定しています。		
ホームページの運用	４００	２０６
第７回　新年会開催	６００	５４７
慶弔行事	５００	３４３
長寿者表彰予定者　１０名		

Ⅱ．収支予算

A）収入の部

１．会　　費	1,７００	1,６４６
２．双日助成金	2,３００	2,３００
３．寄　　付	０	２１
４．そ　の　他	０	４０
合　計	4,０００	4,００７

B）支出の部

１．総会開催	９００	７８２
２．新年会開催	６００	５４７
３．会報・会員名簿の作成	８００	９９５
４．ホームページの運用	４００	２０６
５．会員慶弔	５００	３４３
６．世話人会の運営経費	３００	２５０
７．事務所運営経費	８５０	８７３
８．予備費＋雑費	１００	９７
合　計	4,４５０	4,０９３

C）繰越金及び預り金の部

当期収支残高	－４５０	－８６
前期繰越金	2,１３３	2,２１９
当期末繰越金残高	1,６８３	2,１３３
次年度以降年会費等	０	７２４
双日次年度助成金	０	５７５
預り金残高	０	1,２９９
合　計	1,６８３	3,４３２

１）郵貯銀行
口座番号：００１００－４－３１８０４１
口座名義：ニチメン東京社友会

２）三菱東京ＵＦＪ銀行東京営業部
普通口座
口座番号：８２２５１５５
口座名義：ニチメン東京社友会　代表　倉又則夫

振込に際しましては、振込者名欄に　ご自身の名前を最初に　左詰めにて　記載願います。
（ネンカイヒ　、ニチメン　、　ＸＸネンドカイヒ　等の記載が　あると　振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。）

（註１）長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させて頂きます。（会運営上大変助かります）
但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。
（註２）長寿者氏名（50音順　敬称略）：
相原淑、石川勝美、井本公一、岩居宏一、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、門松孝、上条達雄、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、佐藤信世、椎木与志也、鈴木明、鈴木邦治、南部晴雄、西尾敬一、西田啓一、藤田一郎、古川熙、松田好生、宮田信雄、望月昌徳、諸橋良吉、山口富治、山口冨美子、山口良孝　　以上　29名
（註３）2014年度(2014.7～2015.6）年会費納入済会員（50音順敬称略）：
赤澤宏哉、蟻本守夫、岩田功、小野宗一、小野稔、亀田昭、川畑勝四郎、新藤孝、塚田尚、土井安之、平井出良彦、平尾龍介、堀江亘、松崎利夫、八津道夫、若月義和

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

★　ホームページ班からのお願い

E-mail Address　登録更新／新規登録を願いします!

社友会世話人・ＨＰ班　　**栗田 久彌　倉持 次雄**

Ｅメールを活用なさっている会員諸氏へのお願いです。
① **登録済みのメールアドレスの再確認作業にご協力下さい。**
② **未登録の方々は、この際是非新たに登録下さるようお願いします。**

これ迄に多数の方々にメールアドレス(アドレスと略称)をご登録頂き、当班で厳重に管理・活用をして参りましたが、社友会発足当時からか既に可也の日時を経過しておりますので、会報No.15の発行の機をお借りして、上述①又は②を会員の方々にお願いするものです。
ご登録されるアドレスは当班世話人以外には開示されることなく保管されておりますので、安心して開示下さる様お願い致します。

アドレスをお預かりする目的は、勿論社友会関係で有用・必要と思われる各種情報を迅速にご連絡する為であり、お預かりしたアドレスは社友会関係の要件以外には今迄も全く使用しておりませんし今後もその原則は堅持されます。

因みに、今迄にも会員の方等から他会員のアドレスを開示して欲しいとの問い合わせが偶さか有りましたが、その場合は、「『HP関係のみに使用する事と他への開示はしない』ことを条件に開示して貰っているので、申し訳ないが開示出来ない旨と、どうしてもアドレスを必要とする場合はご本人に直接問い合わせて下さい」とお願いしております。

尚、再確認・登録方法としては、下記内容のメールを栗田・倉持宛にご送信下さい。

記

メール件名：　**1）再確認の方は**　　**メールアドレス再確認**
　　2）新登録の方は　　**メールアドレス新規登録**

本　　文：　**短文＋ご芳名　又は　ご芳名のみ**

送　信　先：　**栗田　久彌**　　kurita138@jcom.home.ne.jp
　　倉持　次雄　　krabic@jcom.home.ne.jp

以　上

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

事務局からの報告とお願い

東日本大震災による震災遺児への義捐金

総会では、ワンコイン募金（500円以上）の呼びかけに賛同戴きありがとうございました。

集まった義捐金（51,145円）に予備費を加え、あしなが育英会の“あしなが東北レインボーハウス建設募金”へ10万円を寄付いたしました。

本年度も、引き続きあしなが育英会への寄付を継続いたしたいと考えております。

新年会当日、会場にて改めて会員各位へ寄付をお願いいたします。

皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

平成26年長寿者お祝い対象者リスト

白寿　　**１９１５年生**　　対象者：なし
米寿　　**１９２７年生**　　対象者：８名

米寿対象者リスト

江渕　正昭　３月　・　**木内　純一**　３月　・　**斉藤　　弥**　10月　・　**福原　昭二**　３月
藤野　泰三　７月　・　**松尾　憲一**　５月　・　**三宅　　葉**　３月　・　**丸山　修作**　３月

外務大臣賞　受賞　―神原勝行さん―

編　集　部

在ポーランド、ニチメンＯＢ神原勝行さんが、この度、外務大臣表彰を受賞されました。

同賞は、国際関係の様々の分野で活躍し、わが国と諸外国との友好親善関係の増進に顕著な功績のあった個人および団体に対して、その功績をたたえるとともに、その活動に対する一層の理解と支持を国民各層にお願いすることを目的としている。

10月31日ワルシャワの日本大使館で大使より直接受賞された。
神原さんは、昭和40年入社、鉄鋼原料部出身。
現在は日本精工（ＮＳＫ）ワルシャワ所長で、双日欧州のポーランド・コンサルでもある由。
以下は、鉄鋼原料会・会長松尾憲一さんあてのものを松尾さん同意を得てご紹介します。

鉄原会代表　松尾憲一様

皆さまの心温まる祝辞に恐縮いたしております。

1971年に金田常務取締役の命により社会主義体制下のカトヴィッツェに赴任して、石油ショック、戒厳令と配給など、さまざまな浮世の波にさらされましたが、ニチメンの皆さまのご支援があり、なんとか乗り越え、紆余曲折があったものの、日本精工に転職し、32年の駐在員生活を経て今日に至っております。

ニチメン駐在員事務所もその後、双日と名前を変えました。また、当時、一緒に仕事をした現地スタッフの多くが定年を迎え、事務所を去り、一部の人達は鬼籍に入りましたが、その他の人達はそれぞれの引退生活を楽しんでおります。

現在の双日ワルシャワ事務所は同期の中條が採用した現地スタッフが責任者として立派に事務所経営を続けています。これも私にとってはうれしいことの一つです。このような経緯を含めて、長い駐在の中で、私がしてきたことが日本とポーランドとの結びつきを深め、両国の理解を深めることの一助になっているとしたら、これほどうれしいことはありません。

まだ暫くは当地に滞在する予定でおりますので、当地をご訪問する際には是非ご一報賜りたく。家内ともども歓迎いたします。

10月31日、山中誠大使主催で伝達式を大使公邸にて；
写真の右側から、山中大使、神原夫妻、山中大使令夫人。

訃　　報

（平成25年6月1日～25年11月22日）

※印は非会員

ニチメン東京社友会

氏　　名	出身部門	ご逝去年月日	享　年
三　船　弘　雄※	鉄　　貿	2013年6月29日	75歳
海老原　　弘※	鉄　　原	2013年8月14日	78歳
五　井　　壽※	業　　務	2013年9月16日	64歳
保　田　節　雄※	役　　員	2013年9月17日	81歳
窪　田　良　俊※	紙　　パ	2013年10月2日	74歳

ニチメン大阪社友会

氏　　名	出身部門	ご逝去年月日	享　年
森　田　忠　男	繊　　維	2013年4月20日	72歳
信　貴　健　一	人　　総	2013年5月20日	77歳
中　西　千代子	繊　　維	2013年6月8日	90歳
田　中　義　巳	社　　長	2013年7月11日	87歳
渡　部　房　俊	繊　　維	2013年7月31日	79歳
下　垣　　一	不　　明	2013年8月25日	89歳
中　村　順之助	繊　　維	2013年9月27日	88歳
鈴　鹿　美　憲	繊　　維	2013年10月5日	77歳
河　野　賢　一	紙　　パ	2013年10月28日	92歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

会員寄稿文

読　　書

三分一　克　実

駅前ビルにスポーツジムがあり、平均して週5日、年間200日くらい通ってますが、同じ階に市の図書館があります。おかげでジムで軽く汗を流した後、図書館に寄り、新聞、雑誌を見たり図書を借り出すのが午前中の日課となりました。書評等で読みたいと思った本をリクエストカードに書き申し込むと県内各図書館のネットワークで検索し何処からでも取り寄せてくれるので大変便利です。此処何年かは読んだ本をノートに記録し、感銘した本に赤丸印をつけることにしてます。年間200冊程度読んでますが、赤丸印は矢張り二度、三度と同じ本を読みかえした記録があります。

テレビ、新聞、インターネット等で、一見するだけですぐ忘れ去られる軽薄な情報があふれる昨今、著者が長年の研鑽の上、推敲をを重ねて書き上げた著書は何時までも心に残ります。読書により宇宙誕生の過去から、地球上に人類があふれる現在、科学の進歩に伴なう未来予測と本を開く度に居ながら広がる世界は知的興奮をもたらします。

この旺盛な未知への探究心を何時までも持ち続けたいと願ってます。

此処数年の赤丸印を下記しました。

2001年

コンタクト　カール セーガン
アメリカの鏡 日本　ヘレン ミアーズ
文明の衝突　サミエル ハンチントン
敗北を抱きしめて　ジョン ダワー

2002年

大英帝国衰亡史　中西　輝政
脱牛肉文明への挑戦　Ｊリフキン
隠された十字架　梅原　猛
都留重人自伝　都留　重人

2003年

近代日本の政治家　岡　義武
歴史とは何か　岡田　英光
江戸時代の遺産　スーザン Ｂハンレー
閉ざされた言語空間　江藤　淳
明治天皇　ドナルド キーン

2004年

リビング ヒストリー
ヒラリー セダム クリントン
日本人よ成功の原点に戻れ
マハテイール ビン モハマド
智に働けば角が立つ　森嶋　通夫
反日からの脱却　馬　立誠
鎮守の森は泣いている　山折　哲夫

2005年

日本文明77の鍵　梅棹　忠夫
フランス破れたり　アンドレ モーロア
世間とは何か　阿部　謹也
日本奥地紀行　イサベラ バード

2006年

ウオール街の大罪　アーサー レビット
中国農民の反乱　清水　美和
中国権力者たちの身上調書
アンドリュー ネイサン
忘れられた日本人　宮本　常一
インドの時代　中島　岳志

2007年

未完の国鉄改革葛　西　啓之
僕の血となり肉となつた50冊　立花　隆
歴代の駐日英国大使　サー ヒユー コーダツイ
麻雀放浪記　阿佐田哲也
生物と無生物のあいだ　福岡　伸一

2008年

逝きし日の面影　渡辺　京一
知られざる魯山人　山田　和
宇宙への秘密の鍵
ルーシー ＆ ステイーブン ホーキング
本当の環境問題　養老　孟司

中国の闇　何　清漣
中国 危ない大国　スーザン Ｌシャーク
ガイアの復讐　ジエームズ ラブロック

2009年

生命40億年史　リチャード フオーテイ
マイ ドリーム　バラク オバマ
さゆり　アーサー ゴールデン
山県有朋　伊藤　元雄
ブラツクダリアの真実　ステイーヴ ホデル
近代アジア精神史の試み　松本　健一

2010年

世界地図の中で考える　高坂　正堯
人間の絆　サーマセツト モーム
伊藤博文　滝井　一博
文化としての科学・技術　村上陽一郎
特攻　マクスエル テラー ケネデイ

2011年

私の読書遍歴　木田　元
高峰秀子の流儀　斉藤　明美
不思議なキリスト教　橋爪大三郎
利己的な遺伝子　リチャード ドーキンス
ドナルドキーン自伝　ドナルド キーン
世界を知る101冊　海部　宣男

2012年

日本の歴史　網野　善彦
地球に残された時間　レスター ブラウン
天皇と原爆西尾 幹二
生命の意味論　多田　富雄
2100年の科学　ライフミチオ カク
いねむり先生　伊集院　静

2013年

知の逆転　吉成真由美
中国は今　国分　良成
趙紫陽極秘回顧録　趙　紫陽
立花隆の書棚　立花　隆
近代中国史　岡本　隆司

人と人との不思議な出会い

大　山　弘　雄

数年前の会報№7で私は「今が好き」という題名で歌手由紀さおりとの不思議な出会いについてのエピソードを寄稿させて頂きました。今年惜しくもお亡くなりになった田中義巳元社長との初対面も偶然とは言え珍しい出会いであったと言えるかも知れません。

私が田中さんとお会いしたのは、今から丁度50年前、私が27歳で初の海外勤務（サンダカン駐在）を拝命、赴任途中に経由地のシンガポール空港に降り立った日のことでした。

海外で出会った最初のニチメンマンということになりますが、当時田中さんはシンガポール支店次長をされていたはずで、私と同じ飛行機に乗っていて日本から帰国途中のインドネシア人の重要取引先であるプリさんという方を迎えに空港に来ておられました。

しかし、私はそのことについては全く知らなかったのです。恥ずかしいことに、その時の私は空港ロビーで手荷物のclaim tagを紛失し少し気が動顛していました。必死でそれを探していた時、待合室のソファーの下に落ちているのを見つけて下さったのが上記のプリさんでした。ひょんなことからプリさんと知り合いになりましたが、驚いたことに、そのプリさんが私宛の名刺を持っておられたのです。名刺は濱田雄三大先輩のもので、そこには走り書きで「大山君元気で行ってきて下さい」と書いてありました。

後から思ったことですが、「当時名古屋支社副支社長であった濱田さんは、同じ名古屋支社から海外へ赴任する私がプリさんと同じ飛行機に乗ることに気付かれて、羽田でとっさにプリさんに名刺を託された…。プリさんは私がどんな男かは分からないがとにかく名刺を預かった…。飛行機の中で気になっていたのだが、シンガポール空港でやっとそれらしい人間を見つけた…。それが私だった…。」ということであったに違いないと。

プリさんを迎えに来ておられた田中さんは、私がニチメンの若き後輩で任地サンダカンへ赴任の途中であることはご存じなかったはずですが、上述の事情で同じ会社の人間であることを知ることになりました。かくして、私の海外初日は、ニチメンという糸に結ばれた不思議な出会いがあり、さらに田中さんのご好意でプリさんと一緒に空港から永井支店長宅へ直行し泊めて頂くという幸運に恵まれ、濱田さんの温かい励ましと共に、終生忘れがたい思い出の１日となりました。

翌早朝、私は僻地ボルネオ島のサンダカンへ向かってシンガポールを後にしたわけですが、その後お会いする機会もなく田中さんの面前でその時のお礼を申し上げたのは、田中さんが社長になられてからのことでした。しかし田中さんが、その時のことをはっきり覚えていて下さっていたことには大感激でした。

田中さんの社長時代には会社100周年の記念事業や社史編集も行われ、ニチメンとしての最後の良き時代であったと思われます。私も社長室の一員としてスピーチ原稿作成その他諸々についてお手伝いをさせて頂きましたが、これもご縁があったからということになるのではないでしょうか。

振り返えれば、ニチメンには風格のある立派な先輩がたくさん居られましたが、濱田さん、田中さんには、人と人との不思議な出会いや人間の繋がり（絆）の大切さについて教えて頂いたような気がします。

ここに改めて両大先輩のご厚情に感謝し、ご冥福を心よりお祈り申し上げる次第です。

インド雑感－４
インドとインド人を理解する為に

高　尾　　勝

Ⅰ．多様性 (多彩性)

インドは多様性の国と云われるのは、其処に住むインド人が多彩であるからであり、この両者をclear cutに説明することは不可能だと思う。全てに複数の種類があり、それが輻輳して絡むので、標準を決めることは極めて難しい。

人種、宗教、言語、階級。都市と地方、地方には様々なコミュニティーが存在。又 経済成長の過程でインド人も部分的に変化している。

何にでも例外はあるし、以下述べることは、一つの目安でしかないことを断っておく。

Ⅱ．インド人を理解するための諸背景

インドの歴史・思想・社会構造などを学び、且つ多くのインド人と付き合えば、インド人の特性が茫洋とした形で浮び上って来るであろう。

1. インドは多民族国家

古くからさまざまな民族が侵入し土着或いは先住民族と混血を繰り返してきたインドは多民族が混淆して住んでいる。ベトナム人、カンボジャ人などの先祖と共通すると云われるアウストロアジア語族が土着民で、紀元前3500年頃、西のイラン高原からインド北西部にドラヴィダ族が移住してきて、歴史教科書が挙げるモヘンジョダロ、ハラッパなどのインド最古の都市文明をインダス河流域一帯に創り上げた、と言われる。

ドラヴィダ民族は色が黒く小柄で穏やかな民族で紀元前1500年頃侵入してきた白色人種のアーリア民族に征服され、南印 更にはスリランカに押しやられたようである。

アーリアとは「高貴」を意味し、彼等は先住のドラヴィダ民族を肌黒・低鼻・異言語・異宗教と蔑視差別し、これがカースト制度の原点になった。アーリア系インド人は自己主張型、南印のドラヴィダ系インド人は友好的と云われるが、混血・移住などで一概には該当しなくなっている。

尚、インド東北部からネパールにかけてチベット・ビルマ語族が住んでおり、釈迦族はこの語族に属する。

2. 宗教面から見たインド人

80％強のヒンズー教､13％のイスラム教、２％のキリスト教、２％のシーク教、１％のジャイナ教、１％弱の仏教。インドは政教分離主義が大原則で、宗教による差別は禁止されて六つの宗教が共存しているし、国家の定める休日とは別に、州が各宗教の祝日を休日に定めている（国家祝日は元日、共和国記念日、独立記念日、マハトマ・ガンディー生誕日、の４日だけ)。

(a)　ヒンズー教

アーリア人が創ったバラモン教が土着の多神教と融合した多神教。宗派が幾つも出来たが輪廻転生や解脱を説くのは共通する。信者は八百万の神を信奉するが、地域の神や家族の神を選ぶことも多い。弁才天、毘沙門天、吉祥天、亦仏法の守護神とされる大日如来、梵天、帝釈天、閻魔などもインドの神々である。ヒンズーは生まれながらにしてヒンズーであり、他宗教からヒンズー教に帰依はあり得ないし、排他性の面がある。

(b)　イスラム教

インドは、インドネシア、パキスタンに次ぐ世界３位のイスラム国。

平常ではヒンズー教徒と回教徒は争うことなく共存しており、何人かの回教徒大統領などを輩出しており、時に宗教暴動が発生しているのは政治的煽動によると云えよう。

尚、インドのムスリムには、ムガール王朝時代に自発的にイスラム教に改宗した上流階級と、神秘主義僧侶の布教で、下層ヒンディーが帰依したムスリムが在ると云われる。

(c)　シーク教

ナーナク （1469－1538） が開祖で、ヒンズ―教とイスラムを批判的に統合した一神教で偶像崇拝、カーストなどを否定する。旧来のPunjab州からヒンズー主体の地域がHaryana

州として62年に分離独立した。

信徒はPunjab州主体で2000万人程度だが、ターバンを巻き髭を生やしたインド人と云う私達のイメージはシーク教徒である。体格容貌魁偉、頭脳明晰で根性がある為各方面で活躍している。マンモハン・シン 首相、中央計画委員会モンテク・アウラリア副委員長もシーク教徒。

(d)　ジャイナ教

仏陀と同時期、紀元前６－５世紀にヒンズー教の改革派として誕生。禁欲・苦行を特徴とし、アヒンサー（生物殺生禁止）の教えを説いたマハーヴィーラが開祖。信徒は根菜摂取を忌避する場合も多く（野菜の葉は摂る）、職業も商業に就くものが多い（特に宝飾関係）。

(e)　仏教

ガンジス河流域のマウリア王朝の３代目アショカ王が紀元前263年仏教に帰依して庇護、クシャナ朝三代目のカニシカが紀元140年に即位して仏教は大いに栄えたがが、ヒンズー教の中に埋没し、第二次大戦前にはほぼ消滅した。

戦後、下層カースト出身者でインド憲法策定者アンベードカル博士（初代法相）が大勢のダリットと共に仏教に改宗し、藤井日達師ら日本人仏僧の普及活動で信徒約1,000万人。

(g)　パーシー (パルシー)

イスラム教徒に追われて８世紀にペルシャからインドのグジャラートに来たゾロアスター教徒をパーシーと称する。以前、世界のパーシーの人口10万人と云われたが、結婚の規制が厳しく人口減で現在６万人とも云われている。異教徒と結婚した女性は終生パーシー資格剥奪され子供も無資格。パーシー男性に嫁いだ異教徒女性も資格は貰えないが子供は有資格。財閥タタなどインド経済界では有力者が何人もいる。

3. カースト制度とインド人

1500年代初頭にインド南西部に来着したポルトガル人がインドの社会構造をCaste（家柄・血統）と呼んだ。カースト制度は下記のヴァルナとジャティーによって序列化された社会制度で、この身分制度の根幹には高位カーストほど浄で下位カーストは劣ると云うヒンズー教独特の浄・不浄の概念がある。又、この浄・不浄の概念が善行を積めば来生はより上位のカーストになれると云うヒンズー教の業・輪廻の教えと結びついてカースト制度を支えている。

バラモン（僧）、クシャトリア（王族・武士）、ヴァイシャ（庶民）、シュードラ（隷属民）

の四種姓はインド語でヴァルナ（Varna）と云い、社会の大枠を示すもので、Varnaはサンスクリット語で「色」を意味し、アーリア人が自らの白肌を頂点にし、穢れの概念（浄･不浄）を取り入れた社会構造である。各ヴァルナ内で通婚し、異ヴァルナとの混血は避けるべきであり、隷属民は上位カーストに仕えるものと位置付けられており、更に不潔或いは汚らわしい職業に就く者、例えば生理的汚物処理者、屠殺者や隠坊などは、四種姓の埒外の不可触民（Dalit） とされた。

後世、下位２ヴァルナと職業との関係に変化を生じ、ヴァイシャは商人、シュードラは農業･手工業従事者を指すようになり、シュードラ差別は緩和された。尚、回教徒、仏教徒、或いは外国人はヒンズー規範の四種姓に該当しないゆえ埒外の不可触民（outcaste） と同列にされている（現実には外国人がそのような目に遭うことは殆ど無い）

他方、ジャティー（Jati）と云う言葉が「生まれ」を意味して、「職業別の階層制度」を指しサブ・カーストとも云われる。数えきれないほど細分化された、通婚・相互扶助を共有する世襲制度の職能集団を指し、僧職から屠殺職などまで 職能集団は2000とも3000とも云われ、自ずと上記ヴァルナと結びついて職能集団にも上下関係が生まれた。

このようなカースト制度が厳然と存在するが、ビジネスの世界では殆ど影響がないと云えるし、スズキ自動車などカーストを逆手にとって会社は一つのコミュニティー（カースト類似）として社長も大部屋で執務、食堂も従業員と一緒にして会社内での差別排除の例もある。

4. 言語から見たインド人

公用語であるヒンディー語や英語は「共通語」であり、国語と云う意味では22の言語が、ヒンディー語も国民の１％も話さない少数派言語も原則的に同等の扱いで、紙幣には合計17の言語が刷り込まれている。

インドの言語は印欧語系とドラヴィダ語系に二大別される；

(a)　印欧語系　：　ヒンディー、ベンガリー、パンジャビー、グジャラティーなど紀元前1500年頃西北から移住してきたアーリア人の言語から発達したものだが、夫々の語の文字は異なっている。インドの約70%が使用している。

(b)　ドドラヴィダ語系:タミル、テルグ、カナリーズ、マラヤーラム

インドは、独立当時に原則として使用言語を基準にして、地域を分割して州を成立させたが、近時言語以外の要素で旧州が分割された例も幾つかあり、現在のインドには28州があるし、今なお州分割の火種が燃えている。

言語の主なものを挙げると；

(a)　インド北部

ガンジス河流域一帯のヒンディー語（6億の人が理解する)、ジャンム･カシュミール州のカシュミーリー語、パンジャビー語。

ニューデリーではヒンディー語・パンジャビー語・英語の3語記載交通標識を見かける。

(b)　インド西部

商都ムンバイが在るマハラシュトラ州のマラティー語、グジャラート州のグジャラティー語(商都ムンバイでもグジャラティーは優勢)、ゴア州のコーンクニー語

(c)　インド東部

コルカタが在る西ベンガル州のベンガリー語、オリッサ州のオリヤー語、アッサム州のアッサミー語、コヒマ・インパールなどのマニプル州のマニプリー語

(d)　インド南部

バンガロールが在るカルナタカ州のカナンダ語、チェンナイが州都のタミールナド州のタミル語、ハイデラバッドが在るアーンドラ・プラデシュ州のテルグ語、ケーララ州のマラヤーラム語

南印の4語はドラヴィダ系語で、TN州首相Jayalalithaa女史（元女優）はこの4語に加えヒンディー語と英語、計6か国語を流暢に喋る由。

(e)　サンスクリット語 (梵語)

アーリア系古典語、日常生活では使われないがインド全国で宗教儀式には欠かせない言葉である。仏教を通じてその単語が数多く日本にも導入されている。例えば卒塔婆（stupa）, 奈落(naraka 地獄)、涅槃(nivana 終息)　娑婆（saba 忍耐)。

尚、英語は共通語に位置付けられているが、英語を話せるインド人は5－6％程度。但し英語を使える人達の英語力は非常に高い。インド英語の特徴はやや古臭く丁寧で、高位者への文章で’humble’と云う単語をしばしば見かける。

5. インド人の国家観

以前ほどではないが、国家統合・インド国民と云う意識はまだ薄く、自分の出身州を祖国視しているように感じる。又、インドでコミュニティーと云えばある共通の利害・職業・言語・宗教で結ばれた社会集団を指すが、彼等は一般的に国家のことよりもコミュニティーへの忠誠心が大事で強固な団結を誇る。このコミュニティー間の反目が社会階層抗争を招くこともまれではない。

インド人がMother Tongue（母国語）と云えば彼等の出身州の言葉のことで、他州に移住した家庭内で母国語使用は多々見られるし、異なった母国語を持つ男女の子供達は二つの母国語を持つことになり、インド人の語学能の基盤になっている。

Ⅲ．インド人の思考・習慣・特徴

1. 占星術

インド人の生活では、占星上の吉祥日に宗教儀式日、家庭での行事日などを行う。

尚、9月の或る2週間を「シャーラッド期間」として「新しいことをする」のを忌む。

2. 宗教と仕事・生活が密着

信仰心が篤いので寺院も多いし、冠婚葬礼は勿論、会社の行事にも僧を招いて宗教的儀式を行うことが多い。殆どの家庭内に祭壇があり、礼拝は日常化している。

3. 家族・家庭の行事を最優先する、家族思いが強い。又、人脈を大切にする。

日本でも伯父・伯母が三親等の甥姪の冠婚葬礼で会社を休むことはあるが、インドの場合四親等の従兄弟は家族でこれらの慶弔の場合も会社を休むのは常識である。

4. インド人は考え方を変えるのは当然と思っている

安易な約束や発言で外国人を悩ますが、その場その場の状況で考えるので場当たり的な印象をあたえるが、「君子は豹変す」をインド人は当

然だと思っている。

5. 時間感覚に鈍い

ヒンディー語では明日も昨日も「KAL」。アジアの言葉には副詞で時制を表す例が多いが、時間が余り重要視されていないことを意味し、インドでパーティなどが時間通りに始まることは先ず無い。インドの場合「輪廻思想」の影響もあるように思える。

6. 自己責任

近時減ったが、昔は殆どのエレベーターに「At Your Own Risk」と表示してあった。責任を負わされる懸念がある場合極めて慎重であるし、責任転嫁も巧みである。

7. 慈悲と感謝

施しに感謝しない、亦、与える側と受け取る側に上下がない。日本では感謝されて当然のことがインドでは必ずしもそうではない。バラモンや他国の托鉢僧が他者から食物などの寄進を受ける場面、寄進者が頭を下げて差し出している。慈悲を施す側に媚びる必要はないのである。

以　上

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

続々・・イ ギ リ ス 徒 然

柴　田　　隆

イギリス人と酔っぱらい

1）酔っ払いのいないロンドン

イギリス人は酒にだらしないが、街頭では酔っ払いを見かけない。人前で酔っ払うのは社会人として失格だという社会規範があるようである。

ある日、会社よりの帰路、ハムステッドで途中下車し駅前の時々行くパブに立ち寄った。ハムステッドはロンドンの高級住宅地の一つで地下鉄の駅前に良いパブが数軒ある。その夜は、カウンターの隣にいた、公認会計士の資格を持ち、シティでコモデティ・トレーダーをやっている青年と飲むことになった。そのうちにインドカレーを食べに行こうと執拗に誘うので、インド料理店へ行った。カレーとワインを取り話している内にその青年紳士君はテーブルに頭をつけて寝込んでしまった。どうしても目を覚まさないので、お先に失礼したことがあった。当時、日本軍の英国人捕虜収容所を舞台とするホモをテーマにした、大島渚監督、北島武出演の“戦場のメーリークリスマス”が上映されており、かれはこの映画を何度も褒めていたので、彼はあるいはホモだったのかも知れない、ともかく彼はロンドンにいた3年半で出会った唯一の泥酔者であった。

帰国後、日本はアルコールに寛容だ。西欧では街路でちょっと大声でも出せばすぐパトカーが来てブタ箱入りだ、という話を知って、友人に頼んでロンドンの警察に照会してもらった。

その結果、“道路上で歩行困難で座り込んだり、他人の質問に答えられない等の場合は泥酔と判断して3時間留置する。“ことが判明した。

最終的には、住所を聴取して送り届けるが、住所はデタラメが多いそうである。（因みに、根拠法令は“酒を飲んでpedal cycle (自転車？)に乗っている時は逮捕する。“という1872年のSection Act 12だそうだ。）

矢張りロンドンの街頭に酔っ払いはいたのだ。

そう言えば、買ったことはなかったがアルカセルターとか言う二日酔いの薬が市販されていた。又モーニング・アフター（二日酔い）と言う英語もあった。

2）飲酒運転の罰金は所得で決まる（？）

フィンランド航空のロンドン乗り入れ記念パーテイに招待された。当時ビッグ・エイトと言われた米国系の会計事務所に出向で来ていた日本人会計士のH氏とは親しくしていたが、彼も来ておられ、彼と二人でフィンランド人のグループに入って楽しいひと時を過ごした。ユーロビジョン・コンテスト（欧州歌謡祭のようなもの）で優勝したフィンランドの歌手も一緒だった。フィンランデ

アとか言うウオッカをベースの口当たりの良いカクテルを主として飲んだ。

お開きとなり、H氏を助手席に乗せ帰路についたが、曲がり角で一瞬眠ったようで、直進して向かいの歩道に乗り上げ目を覚ました。車を車道に戻し走り出したが、前輪2輪がパンクしていた。予備タイヤは一つである。仕方がないので、其の儘ゴトゴトと走っていた。少し走ると、パトカーが追いついてきて捕まってしまった。

警察署で少し待たされ、医者（女医だった）が血液検査をして放免された。少したって裁判所への出頭命令が来た。

ある時、パブで出会ったアイルランド人が“車を手放した。”と言うので、不便ではないか、聞くと、“パブを廻るのに使っていたので・・”との答えに面食らったことがあった。このように飲酒運転は昔は可なり大目に見られていたようだった。

裁判所の出頭命令も同様で弁護士に頼めば、仕事が忙しいとかの理由で半年位の延長は可能だったようである。そこで弁護士に依頼して延長交渉してもらったが、だんだん厳しくなっているとのことで、1ヶ月位しか延長できなかった。

その期日が来て裁判所に出廷した。私の前のギリシャ人に裁判官（女性だった）が所得を訊いていた。罰金の金額は分からなかったが、そのギリシャ人は子供が多くて・・・と随分泣きを入れていた。所得によって罰金が情状酌量されるらしいのは分かったが、当方はそこそこの所得なので、罰金の減額は当初から諦めた。なにも言わないのも癪なので、分割払いを申しいれたが、却下された。

この件では警官は男だったが、医者も裁判官も女性だった。裁判所で女性裁判官を見て、“武士は相身互い”は通じないと観念した。

パブ――意外な一面

1）パブで酔っぱらうのは禁止されている

パブで酔っぱらいがいるとパブの主人は罰金を払わねばならないそうだ。

“酔っぱらい、暴力行為、口論、騒々しい行為を許したり、又酔っぱらったお客にアルコール飲料を売った”時には、パブの親父に初回10ポンド、次回より20ポンドの罰金が課せられる。酔っぱらいのお客はパブから出ていけばよく、出て行くのを拒否した場合には5ポンドの罰金が課せられる。（1964年ライセンシング・アクト。）

居酒屋で酒を売らせておいて、酔っぱらったら、つまみ出せということである。なんだかおかしな話だと思うが、それだけ酔っぱらいが多い（又は多かった）ということであろう。

オリエンタル・フラッシング（酒で顔が赤くなること）という言葉があるが、東洋人は酒に弱い。アルコールは肝臓で分解されアセトアルデヒド（二日酔いのもと）になるが、これを分解する酵素を持たないとすぐ酔っぱらってしまう。日本人もこの酵素を持たない人が多いので、40％は下戸だと言われる。

一方西洋人はこの分解酵素を持つ人が多いので、酒には強い。その反面、酒におぼれてアルコール中毒になる人が多くなる。

ビールの好きなゲルマン人とバイキングの末裔のノルマン人を先祖に持つイギリス人は“飲みっぷりを競い合う”“量が肝心”という遺伝子を引き継いでいるようだ。又17世紀から18世紀にかけジンが大ブームとなり、特に労働者階級では子供までもが“アルコール中毒”状態になっていたそうである。イギリスでも泥酔者にたいする社会的制裁は厳しい。それでも泥酔するというのは、酒の量をこなすという国民性で、アル中になる人が多かったということかもしれない。

あるフランス人の19世紀の英国見聞記では、“フランス人は飲むとおしゃべりをする。ドイツ人は寝てしまう。所がイギリス人はケンカをはじめるのだった。”と伝えている。あの資本論を書いたカール・マルクスは19世紀後半ロンドンに亡命している。彼はドイツの悪口を言ったイギリス人とパブで乱闘を演じたとの逸話が伝えられているように、当時イギリス人は酒を飲んでケンカをよくしたようだ。

これはイギリスは紳士の国と言うイメージとは大いに違うが、泥酔者がパブで問題を起こすことが多かったので、このような法律が出来たのかもしれない。

同じ19世紀にサミュエル・スマイルズは“天は自ら助くるものを助く”で始まる「自助論」で「わずかな時間をムダにせず、こつこつと努力を続ければ、積り積って大きな成果に結びつく」と勤勉を説いている。

酒におぼれた人々に、スマイルズは“勤勉に仕事をしろ”と説きたかったのだろう。しかしイギリス人は相変わらず酒も勤勉に飲み続けたということだろうか。

さんりく・大船渡ふるさと大使
東日本大震災被災地における活動とそこから学んだことについて

千　田　俊　章

今年７月下旬、会報編集責任者長谷川洋さんから、持ち前の明るさと丁寧かつ温かい気配りのお電話を頂きました。趣旨は会報15号に、世話人の橋本春彦さんのお勧めがあり、被災地の活動などについて、自由に投稿して欲しい旨の内容でした。日頃ご無沙汰している小職にとり大変恐縮かつ光栄です。ありがとうございます。小職はニチメン株式会社通信部と機械部門でお世話になりました。りっぱな上司や諸先輩に恵まれた環境でご指導を賜りました。そして優秀な社員と素晴らしい御客様と関係する一流メーカーの人たちに教わり、人生の基礎作りはニチメン時代に出来たことに大変感謝しております。49歳の時セゾングループに転職、その後リガクグループや日立グループに御世話になりました。縁があり、59歳から64歳までニチメン株式会社に復職お世話になりました。65歳以降はインドのIT関連の会社に勤務しながら、出来る限り、“ふるさと”を中心とした社会貢献活動に励むように努めております。目標はこの世に生存する限り、健全な納税者であり続けること、自分の時間はふるさとと現在住んでいる地域のお役に立てる活動を続けることです。小職の活動状況とその背景については東京社友会WEBの生活情報欄に“東日本大震災　ふるさとの現場から　ふるさと大使かわら版通巻61号”をご参照お願いいたします。色々な企業や団体から、大船渡市に向けて、今でも継続的なご支援とご協力を頂いております。大変ありがたく常に感謝の気持ちで一杯です。企業の一例は、株式会社東芝様からNPO夢ネット大船渡に、大量のPCを寄贈頂きました。そして4000人の失業者を救済する目的で被災地にPC教室が設立されました。御蔭さまで地元の失業者救済に教室は大活躍中です。そして二年目は、地元の小中高校、及び福祉施設、病院などに３Ｄ　TVを大量に寄贈頂き、各組織に活気を取り戻すことが出来ました。またTAMC（東京アマチュア・マジシャンズ・クラブ）は義援金の他に、会長や会員がたびたび大船渡市を訪問され、市民にマジックを演じ笑いと喜びを巻き起こしました。そして今年から福祉施設や学校を対象に、若手を育成することを目的に、岩手県のご支援も頂きながら、マジック教室が設立されました。ここで市民がマジックを作りだす喜び、マジックを演じる喜び、マジックを観る喜びを実感できる様に仕組みができました。被災者の心のケアに役立っております。その他に、現在居住する調布市では、調布市長を始めとした調布ライオンズクラブ、社会福祉協議会、下水道組合、建設組合の皆様が大船渡市に継続的な支援活動を実行されております。また、全国ふるさと連絡会議から、継続的なご支援を頂き、地元の新聞社東海新報が中心となり、地元のジャズ愛好家が米国の有名なピアニスト、作曲家ボブ・ジェームズ様と被災地で共演、市民に元気を取り戻す企画などが繰り広げられております。地元の復興状況については“大船渡市で再起した事業主に学ぶ”と題して、ふるさと大使かわら版66号に掲載された内容をご紹介いたします。人間の社会は、お互いに励まし励まされ、勇気を生み出すことが、非常に大切なことを学びました。被災直後、学校の体育館に避難した人たちは、十分な暖房もないところで、静かにじっと暮らす避難民を観た米国人は、米国なら喧嘩や暴動が起こっているのに信じられない光景だと呟きました。そして最近のニュースで、電車とホームに挟まれた女性を乗客が全員協力して、直ちに救出できた報道に接し、これこそが日本特有の美徳であり、和を尊び、礼節を心得た人が沢山いる日本に生まれ育ったことに改めて幸せを感じるこのごろです。皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

ふるさと大使かわら版（通巻第66号）　　2013（平成25）年1月23日（水）新春号

被災地・大船渡市で再起した事業主に学ぶ

さんりく・大船渡ふるさと大使　　千田 俊章

謹賀新年　最初に皆様の温かい継続的な御支援に感謝申し上げます。3.11 直後、義援金の御高配そして代表山口義夫様をはじめとする役員の方々が、現地を訪問され激励を頂きましたことに対し、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

さて昨年12月19日、ふるさと大船渡市でマジック教室を開催しました（**写真**）。“市民に笑いと喜び”を巻き起こすことが目的でした。地元で学んだことをご報告いたします。

東海新聞　平成第16537号　平成24年(2012年)12月20日(木曜日)

健康増進のタネ学ぶ

高齢者大学でマジック教室

大船渡

被災者はご自身が持つ全ての財産（もの）を津波で流され失いました。でも命が助かった人の魂まで津波は持って行けませんでした。魂は力強く、いかなる困難も克服して、明日に向かってひたすら前に進む、不思議な力を持っています、これが復興の原点にあることを知りました。そして人はお互いに助け合い、どんなに難しい問題が生じても、それらを解決し人をまとめる力が働き、皆が協力してまとまる力を備えている。物事は不言実行、自助努力でひたすら前に進む、自分の育った環境を大切にして、その環境を今まで以上に更に良い環境にするように努力している人間の尊さを学びました。

◇　◇　◇

いくつかの事例を紹介いたします。

その1　二つのホテル事業主

大船渡市の駅前に３階建てのホテル福富と５階建ての大船渡プラザホテルがあります。ホテル福富は海辺に近く元々土地は70cmほどかさ上げされていたために津波は１階だけの浸水で済みました。２、３階は無事でした。一方５階建ての大船渡プラザホテルは、海辺より少し離れたところですが、元々平地だったので津波は３階まで浸水し、大きな被害を受けました。両ホテル共に鉄筋の建物だけは無事でした。ホテル福富の女将は被災後４カ月後に、無事だった２、３階を利用して事業を開始しました。その後大船渡プラザホテルは建物をリニューアルして８カ月後に事業を再開しました。両ホテルの事業主は復興支援する人たちの宿泊施設を一日も早く準備して、一緒に復旧に役立ちたいと言う思いと、自分が立ち上がれば、周りも立ち上がり、徐々に人が集まり復興が早まるという思いが人一倍強かった模様です。両方のビルの周りの土地は今でも高潮の時は田んぼの様に塩水で溢れます。取りあえず、道路だけがかさ上げされている状態です。

その2　割烹うら嶋

ホテル福富、大船渡プラザホテルのすぐ傍に、割烹うら嶋が事業を再開しました。津波でお店は全滅でした。近くにあった鉄骨構造３階建てのご自宅は津波で被害を受けたものの流されませんでした。事業主（63歳）は被災後、仮設住宅に住みながら避難所や仮設住宅に食事を届けるＮＰＯ「さんさんの会」でボランティア活動をしておりました。周りは道路だけがかさ上げされた状態です。周辺の土地がかさ上げされるまで、建物を新築することせずに待っている人が多い中で、とにかく、住む場所、仕事をする場所を確保して日々の生活を早く自助努力で立ち上げる力強さを実感できました。夜は地元の料理を楽しみに集まるお客様で賑わっておりました。

その3　エイサク飴製造元

三陸町にエイサク飴製造元（有）チダエー創業80年程度の伝統を誇り、懐かしい味が人気を呼ぶ飴屋があります。震災で海辺にあった工場は全壊影も形もありません。

自宅は１階に浸水、御主人は仮設住宅に住み始めた１週間後に心臓発作のためヘリコプターで盛岡市の病院に搬入されました。一命をとりとめ入院中は寝言のように「これから先数名の従業員をなじょして食わして行くべか？」とつぶやき続けたそうです。68歳という高齢と心臓病では到底再起は難しかろうと勝手な第三者の想いとは裏腹に、エイサク飴をこよなく愛する全国からもう一度食べたいという励ましの手紙などの声にこたえ、長年の伝統を絶やすわけにはいかないと再起しました。地元新聞によれば、社長は周りからの支えがあってここまで来ることが出来た。一粒一粒に感謝の気持ちを込め、息子や孫に引き継ぐまで一生懸命仕事に当たりたいと笑顔で語ったそうです。

大船渡市のこのような事業主が自助努力で立ち上がろうとする前向きな決断を促した背景には、土地の整備やかさ上げなど全てが整備される前に、行政側も自己責任で再建する意欲を持った事業主に理解を示し、強い規制を行わなかったなど、お互いの理解と支援が徐々に形となってきていることがあるようです。

意欲を持った事業主が地元で育ち、地元で事業を営んでいる人たちは全ての財産を失っても、明日に向かって力強く生きて行く魂は失っていません。どのようにして生き抜くかの智恵を備え、全国の支援、応援の声が励みとなって再起している事例を見て、そこに住む人たちの健全な魂がある限り、そして全国の皆様からの継続的な支援、応援の声がある限り、お互いに励まし、励まされ、そして勇気を生み出して、自助努力で前に進む不思議な力を人間は備え持っているのだと感動いたしました。

カントの「理性批判」と従軍慰安婦発言

竹　内　可　能

カントの述懐

何度読み返してみても感動的なカントの有名な述懐がある。

それをここに引用することから話をはじめさせてもらいたい。著名な彼の三部作の中の「実践理性批判」の結語のくだりに出てくる至言である。およそ二百年以上にもなる昔、まだ近世と呼ばれる世紀の話だが、私にはまるで現代のジャーナリスト立花隆が書き下ろす「宇宙からの帰還」の中の、宇宙飛行士の感懐かと見まがう一文である。

難解といわれるカントの哲学の神髄がこの一文の中に凝縮されているのは、私奴のようなこの道の素人にとっては救いであった。私がこの文章に一入感慨を覚えたのは、彼の言葉の一語一語に響き合う、宇宙（神）と人間理性にたいする真情の吐露である。

とまれ、すでに目を通した方も少なからずおられることとは思うが、あえて下記に引用させてもらうこととしたい。

結　　語

それを考えることしばしばであり、かつ長きにおよぶにしたがい、つねに新たなるいやます感懐と畏敬とをもって心を充たすものが二つある。わが上なる星しげき空とわが内なる道徳法則がそれである。二つながら、私はそれらを、暗黒あるいははるか境を絶したところに閉ざされたものとして、私の視界の外にもとめたり、たんに推し測ったりするにはおよばない。それらのものは私の眼前に見え、私の存在の意識とじかにつながっている。

第一のものは、私の外的な感性界において占める場所からはじまり、私がその内にある結合の網を、宇宙を超えてさらに宇宙がひろがり、天体系がさらなる天体系をつくりなすことで見きわめがたい大きさにまで押し拡げ、さらに加えて周期的運動やその始まりと継続を含む限りない時間の重なりにまで拡張する。

第二のものは、私の見えない自己、私の人格性からはじまり、私をある一つの世界にあるものとして示す。それは真の無限性をもち、悟性（知性）のみの感知しうる世界であり、私がみずからの世界と（それを通じて同時にあのあらゆる可視的諸世界と）第一の場合のようにたんに偶然的にではなく、普遍的かつ必然的に結合しているのを悟るような世界である。

第一の数かぎりない世界の群れの眺めは、いわば私の動物的被造物としての重要さを無に帰せしめる。この被造物は、短い期間（どのようにしてかは知る由もないが）生命の力を与えられた後に、自分がそこから生じてきた物質をこの惑星に（宇宙全体においてみればたんなる一つの点に）返さなければならないのである。

第二のものの観想は、これに反して、私の人格性を通じて知性的存在としての私の価値をかぎりなく高からしめ、この人格性において道徳法則は動物性から、さらには全感性界からさえ独立な、いのちを私に開示する。これはすくなくとも道徳法則による私の存在の目的に見合った定めから、観て取りうるところであり、この定めはこの世の生の制約や限界に限られることなく、それを超えてかぎりなく進むのである。』

カントと従軍慰安婦発言

明治以降カントが読まれはじめるようになって以来この方、幾たびか今さらカントでもあるまいと思われながらその都度、思いだしたように読まれ続けられてきたのがカントだと、どこかで読んだことある。実はその私も今カントを読みかじっているところだ。女房からして何を今さらと訝しがるがそれにはわけがある。

今年に入ってからいつ頃のことだったか、さる政党の共同代表でもあり大阪市長の某氏による、例の従軍慰安婦発言が飛び出したときのことである。あのような発言が外交上にも政治的にも，時局柄を慮れば大変不用意なものであることは大方の指摘を俟つまでもないが、私の危惧するところは別にあった。

私の直感は、従軍慰安婦問題が欧米のジャーナリズムに掴まるとき（彼らによる非難と顰蹙の声の大きさを思うべし）、ことは東西を跨ぐ宗教論の、

これまた不用意にして不毛な戦いに巻き込まれることであった。すぐれて「戦争と性」の問題は、ギリシャ時代にはじまる西洋特有の、まさに古典的で伝統的な、「神と理性」直結の宗教的テーマだったからだ。

余生いうもののあるうちに一度は西洋理性の代表格カントを読んでみたいとかねてから思っていたし、宗教と哲学は私の関心事でもあったのでこの機会を逃したくなかったまでである。

のっけから｛閑話休題｝というのも恐縮だが、カントといえば明治時代の文明開化とともに、旧制高等学校の生徒たちが唄ったとされる愛唱歌、「デカンショー節」の歌詞が思い起こされる。

デカンショー、デカンショーで半年暮らす。
後の半年ァ寝て暮らす。
ヨーィヨーィ、デッカンショー。

ご承知のとおりデカンショーとは、デカルト、カント、ショーペンハウアーからなる、近代を開いた西洋哲学者三人をいっしょくたにした略称である。私は凡俗の輩として、これを好んで唄った旧制高校生に痛く同情の念を禁じえない。カントを筆頭とするこれら巨魁の難解な哲学を半年も続けさせられたなら、後の半年は寝たままで暮らしでもしなければ、狂気の沙汰を巻き戻して正気にもどることも困難だったろう、と思うからである。

思えば明治維新の時代、初回官費留学生としてロンドンに学んだ夏目漱石も、神経衰弱を病み帰国させられそうになったのは、一説には哲学の読み過ぎ（ニーチェの「ツァラトストラはかく語りき」）だったという。考えてみれば漱石もデカンショー節も鹿鳴館時代と軌を一にした国策の脱亜入欧、つまりは「文明開化」という時代的な狂想曲の一コマだったのだろうか。

カントの離れ業「理性批判」

浅学菲才の私奴がここにカント哲学を詳しく論じるつもりのないことは断わるまでもないが、近代における「宗教と哲学」といえば西洋の歴史でいえば誰しも真っ先に挙げるのはキリスト教とカントではないかと思う。ここでは幾多先達の言い古されてきたかもしれないカント評を、私流に恐懼と敬意をこめながら下記に一言。

「神と理性」の問題はプラトン以来西洋哲学のなかで少なくとも19世紀後半まで主題であり続けたといえようか。彼の理性批判の三部作は今で言うなら革命的といっても過言ではない、18世紀におけるカント流の「神と理性」の自己批判であったと思える。

彼は当時すでに驚異的ともいえる自然科学の進歩を前にして、「神と理性」が旧来の独断的な観念論をもってしてはもはや説明困難に陥っていること、そしてまた同様の理由で、自然科学の各分野（数学、物理学、天文学など）がそれぞれに「哲学」部門から独立してゆくのを横目にしながら、本家の「哲学」が学問としての中身を問われていることに危機感をいだいていたのではないか（註：今日では信じがたいような話だが、ガリレーやニュートンが活躍する近世まで、数学や物理学、天文学といった「科学」（science）の分野が、「哲学」（philosophy）の一部分であったことを知る人は少ない）。

このため彼の挑戦は、まず理論理性を論じる「純粋理性批判」のなかで、「神」の隔離に向けられた。論理のなかの神はその存在が証明できない上は、学問としての「哲学」の成立に妨げとなるとした大英断であった。しかしその一方で「実践理性批判」の中では、理性は倫理・道徳（宗教）の問題として「神」の存在を要請する、という論理を展開したのである。自己批判（理性批判）の名の下に繰り出したカントの離れ業と思える。

そこには私のような不学の者でさえ、古来西洋哲学がひとえに「神と理性」を介して求め来った人間理念、「真・善・美」の極限をかいま見る思いがするのである。

神と理性

プラトンからカントを経てヘーゲルあたりにいたる西洋哲学史の系譜を概観する時、そこに見て取れるのは、われわれ日本人には想像を絶するといっても過言ではないところの、西洋人の「神と理性」にたいする圧倒的な信仰と探究の激しさである。

おそらくその激しさは、ローマ帝国の滅亡とともにキリスト教が、ギリシャ伝来の多神教にとって代わるや、プラトンに発する伝統的な西洋哲学もまた、一挙に神学化の波をかぶることとなる、その結果ということになろうか。ここに中世から近代に至る西洋哲学が、実質的には「神と理性」の激しいぶつかり合いさながらの合流、つまり宗教と哲学の切磋琢磨に席捲されてきた歴史だと、観ずることもまた許されよう。

この「神と理性」の合流による不具合を自己批判したのがカントであったことは先述した。かれは「純粋理性批判、「実践理性批判」それに「判断力批判」なる三部作をもって、「神と理性」はそれぞれ別扱いしなければ、哲学が学問として存立できないことを立証する。宗教と哲学の分離論であったのだ。もっとも彼の隠れた真骨頂はといえば、カントはそれでもというべきか、敬虔で真摯なキリスト教徒としての一生を全うしたことであった。

「神は死んだ」と世界に向けて宣った、カントより一世紀遅れのニーチェが、そのカントを好きになれなかった理由がここにある。

日本人と理性

私奴がここに東西彼我の文明比較論をやらかすつもりは毛頭ありえない。しかしそれにしても先述来のあの西洋哲学の中の「神と理性」の強烈さはどうだ。それに比べて見るまでもなく、我が国には「神」はともかくとして、「理性」などという概念そのものが、歴史上にあったためしはあるのだろうか。

おそらくは概念のないところに言葉が存在するはずはないだろうから、「reason」が哲学用語として「理性」と翻訳されて導入されるまで、つまり明治時代にいたるまで、我が国には「理性」と称する概念はなかったのであろう。これは異なことである。だが考えて見れば「philosophy」なる言葉自体が、日本人による翻訳語の「哲学」として日本に入って来たのも明治初期と言われるから（西周の翻訳が元になっている）、もって推し測るべしということか。もっともお隣の中国でも、その「哲学」なる翻訳語を我が国から借用して、ちゃっかり自国語にしているのは、知る人ぞ知る類だが。

因みに古来わが国に「理性」といった概念が全くなかったのか、といわれればそうとも言い切れまい。翻訳語とはいえ「理性」というのは、日本語にぴったりではないかと感心させられるのは、その昔からわが国にも「理」（ことわり）とか「道理」といった言葉があり、文学の世界でならふんだんに使われてきた。「天地（あめつち）ことわり給へ」（神々よ、是非を明らかにしてください。）、といった表現が源氏物語（明石の巻）にも散見されるのは、古今東西の「神と理性」を想わせて興味深い。

もともと翻訳語としての「理性」は「ことわり」でも「道理」でもよかったのであろうが、畢竟するにわれわれ日本人はこの概念を哲学することなど、思いもよらなかったのかもしれない。

寺田寅彦と「自然の無常」

元来が日本人は欧米人に比べると哲学や思想には弱いと言われ続けてきた。そういわれればそうかななどと思いあたるのは、昨今やたら目につく政治家の言葉の極端な貧困と軽さである。哲学や思想のないところに言葉があるはずはないからである

それはそれとしても、それだけで東西に跨るこの文明の落差の説明がつくという話でもあるまい、というのがわが日本人としての人情というものだ。近頃読んだ司馬遼太郎氏のさる対談集の中に、宗教家の山折哲雄氏との対談が載っていたのを思い出したのである。

山折氏が切り出し、司馬氏が大いに感動してしきりに頷くようにして聞き入っていたのが、物理学者にして文学者でもあった寺田寅彦の言葉、「自然の無常」であった。その彼によれば、ヨーロッパ大陸に比べて島嶼からなる島国の日本は、歴史的に見ても宿命的ともいえる天変地異の国であり、古来幾多の自然災害の犠牲に甘んじてきた。日本人特有とも思える仏教的な死生観や無常観の起源は、この自然の無常にこそ求めらるべき、といった要旨だったかと思う。

しかしこの対談お二人に共通の論旨は、日本人の曖昧模糊とした無神論的、汎神論的な宗教感覚を、唯一神（絶対神）を奉じる世界に向けて、なんとかもっと理論的に自己主張の展開がならぬものか、といった苦渋にあったように見受けられたものだ。

日本人の無常観と無神論

以下は寺田寅彦の「自然の無常」の読後感としての、私奴の勝手な想像的「日本人無神論」である。

今次日本人が目の当たりにした東日本大震災ほど、まざまざと自然の無常を感じさせたものはない。あの目を覆いたくなるような無惨な傷痕を見るにつけ、自然の無常などという生易しい感懐もさることながら、自然がいかに非情であり残酷であることか、あらためて思い知らされる。

このような自然が猛威をふるった後の惨禍を目

の当たりにして、人々は何を思うだろうか。私なら真っ先に心の底から思うのは、この世には神も仏もいないということであろう。それこそが私ならぬ日本人の無神論のはじまりではなかったか。この気まぐれな神がもしも唯一の絶対神だとしたら、その神への信仰は絶望でしかありえないからだ。日本人はこの島国の上で、古来このことを骨の髄まで知悉してきたにちがいないのである。

われわれの祖先は、時に応じては「草木国土悉皆成仏」とか念仏を唱えながら、一切の有情はすべて成仏することを信じ、せめて神よりは優しく慈悲に厚い仏に済度を求めたのも、謂われなしとしないのである。

彼我の理性の格差論

西洋哲学における「神と理性」信仰の激しさについては既に述べてきた通り。そしてローマ帝国の滅亡とともに興ったキリスト教の国教化が、プラトンに発する観念論的なギリシャ哲学を摂取したところに、神と理性の合一の凄さがあることも見てきた。

それがどうだ。我が国においては神はともかくとして、「理性」などは、明治にいたるまで概念もなければ言葉すらなかったとは驚きであった。前節で私が寺田寅彦の「自然の無常」を引き合いに出したのは、他でもない、それが引き起こす天変地異の惨禍によって、この島国にはヨーロッパ大陸のように唯一神が成立しなかったことに触れておきたかったからである。

私はあらためて「神と理性」のことを考えている。

日本人が基本的には無神論者だと目されてきたのは、人々がたとえ草木や山川には汎神論的な神を認めても、気まぐれな自然の非情と残酷の中に、「絶対神」の存在だけはこれを認めようとはしなかったからである。さらに言えば、こうした自然の中に不合理をこそ認めることはあれ、「理性」を認めることは遂になかったとしても当然であった。

日本人にとっても汎神論的というならば、古来数々の「神」が存在してきたことはまぎれもない。しかしその神は衆生が自然の厄災から身を守り、五穀豊穣や家内安全を専らとするご利益の「守り神」だった。そこに西洋流にいう理性だの理念の割り込む余地などなかったのであろう。

西洋の哲学史を概観してつくづく思うのは、古代ギリシャ時代以来近代にいたるまで、「イデア」といい、「ロゴス」いい、近代になってから「絶対精神」などと名称は変遷してきたが、それらはなべて宇宙の根本原理か、さもなければ神か理性のことといっても過言ではなさそうである。カントは先述のように神と理性の隔離を説いたが、その彼とて神を否定したわけではなかった。

冒頭に引用したカントの述懐、つまり「実践理性批判」の中の結語をもう一度思い起こしてみたい。実践理性とは今でいえば道徳と言ってよかろうか。彼は天空にさんざめく星空の下で、宇宙とそれを見上げている一惑星としての地球上のただ一点としての自分との間に、限りなく「無限」の共有を、確かなものとして感じている。その宇宙を支配する根本原理は、彼の中では古くはピタゴラスにはじまり、近くはガリレオでありニュートンやライプニッツから学んできた自然法則だった。その彼がいうところの宇宙と共有する自然法則が、即ち彼自身にとっての道徳法則であり、神であり理性であり実践理性だったのだ。

原罪と従軍慰安婦

カントを読みかじってきたばかりに「理性」に力が入り過ぎたかもしれない。ここではその理性と裏腹の関係にあると思われる「原罪」のことにふれて愚稿を閉じることとしたい。

妙な言い回しかと思うが、キリスト教には旧約聖書時代からまことに調法な罪科が見受けられる。それが人間に課せられた「原罪」である。理性をもってしても処理しきれず、やむにやまれず犯すことになる罪科のことだ。そして人間がこの原罪を免れるためには、絶対神に赦しを乞う他はないとされる。アダムとイブの話をもち出すまでもなく、「性」は原罪の筆頭であった。

とまれ、件の大阪市長氏の従軍慰安婦発言にもどろう。要するにここでは、彼氏ならずとも、戦時であれ平時であれ人類の歴史とともに存在してきたはずの、女性特有の春(性)をひさぐ生業に、目くじらを立てることもあるまい、というのが最近までの平均的日本男子の常識であった。

したがって彼氏はその発言後ただちに撤回したものの、沖縄駐留の米兵たちに、近場の風俗店とやらを紹介してかの地の性犯罪の防止にどうか、などとんでもない提言をしでかしたのも、これまた昨今の日本人凡夫の発想にはちがいないのである。だがこの大阪市長氏の犯した大いなる過ちは、一つにはこの島国の人口の約半数は「現代女性」

によって占められているという単純な事実、もう一つはここまで述べてきたヨーロッパ大陸の、激しく執拗な「神と理性」崇拝の歴史、これら二つの認識が欠落していたとしか考えられない。

我が国には古来絶対神の存在がなかったために、明治にいたるまで「理性」の概念すらなかったとする、私奴の持論のことは述べてきた通りである。ましてこの国に「原罪」などという罪の意識や概念があったはずもない。

そのことをさる私の友人(女性)に話したとき、彼女が従軍慰安婦発言について、あんな内容は品性にこそかかわることはあれ理性や原罪なんてものとは無縁ですよ、と言うときの吐き捨てるような口吻に驚かされたものだ。なるほど、われわれ日本人にとっては理性というよりも、「品性」という言葉の方が胸にストンと落ちるものがあるようだ。

品性といえば、福沢諭吉が明治維新期に「丁丑公論」という奇書を著しているが、その中で彼は「品行」こそ国家的な重要性のある徳目だとしてこの言葉を多用している。最近私はこのことを司馬遼太郎の「この国のかたち」を読んで初めて知った。

諭吉曰く「一身の品行相集まりて一国の品行になる」とともに、「一国の道徳品行こそ国を立てる所以の大本」であることを強調してやまぬ。この書が奇書といわれるのは、諭吉の目的は維新当初成り上がり者の官僚の目に余る不品行の糾弾だったが、讒謗律とかいう当時の法にてらしての筆禍を恐れ、ご当人が死ぬまで門外不出だったことによるといわれる。

とまれ諭吉のいう「品行」こそカント流にいえば「実践理性」の他のなにものでもなかろう。一国家のリーダーとして、国際政治の舞台上において他国の指導者と渡り合えるような政治家を目指そうとするなら、ここに「理性」などというような舶来の言葉は無用としても、「たしなみ」程度の文明論的な配慮は求められるのではないか。

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

書評

「わりなき恋」　岸　恵子　著　　幻冬舎

澁　谷　　義

衝撃の恋愛小説！　突然の胸の高鳴り。容赦なく過ぎ行く時に抗（あらが）い、年下の男への愛で身も心も焼き尽くした、歓喜の６年。70代こそ女盛り。最後の恋、最高の恋。著者が10ぶりに世に問う、衝撃の恋愛小説。執筆４年、書き下ろし文藝大作！

主人公の伊奈笙子は70歳、60歳の男性・九鬼兼太との熱烈な恋。パリ－行きの機内で偶然知り合った。伊奈笙子は、国際的なドキュメンタリー作家。秒刻みのスケジュールに追われる、ビジネスマンの九鬼兼太との恋は、お互いの過密なスケジュールの中で、逢瀬を求め合う。舞台は、欧米、東欧、ロシア、インド、中国、日本など、めまぐるしく変わる。

題名のわりなきとは、漢字では理なきと書く。理（わり）とは物事の理非を分かち定める意・道理だが、わりなんかあっては、恋なんてできないことを訴えているのかもしれない？！

ところで、著者の岸恵子は、現在81歳。女優兼作家である。昭和20年の映画・テレビ「君の名は」は、全国的な人気ドラマであった。真知子巻きと主題歌「君の名は」が流行した。佐田啓二が相手役だった。才色兼備の著者である。

岸恵子はフランス人のイヴ・シャンピと結婚、離婚。横浜に住んでいる。この小説は、国際的に活躍した本人の人生ドラマでもあるようだ。322頁もあり読み応えがあった。

朝日新聞平成25・９・13（金）に、「青春スクロール、母校群像記」として、横浜平沼高校出身の女優が紹介されている。岸恵子、草笛光子、そして故人となった北原遥子の三人である。体操ダンスの竹腰美代子も登場している。

書評

「なるだけ医者に頼らず生きるために、私が実践している100の習慣」五木　寛之　著　　中経出版

澁　谷　　義

イージー養生法、気軽に楽しみながら日々を過ごすための習慣。著者は80歳、親鸞、大河の一滴など多数の著書がある。

著者は文藝春秋７月号で､「2013年うらやましい死に方」と題して、広く読者の体験募集を呼びかけている。今や超高齢社会の日本である。永井荷風は、79歳で自宅の火鉢の前で孤独死、亡くなる前日まで近くで好きなカツ丼を食べていた。うらやましい生き方と著者は感じている。

本書の要点を紹介してみよう。

1）心も体の不調も、生命の大事な働きで、強い心、強い体ではなく、よくしなう心と体こそ理想なのです。風邪、頭痛、腰痛などで、気持ちが萎えたときは、それらを心や体の発する声と思って耳を傾ける。

2）三つの休めを、気休め、骨休め、箸休めが養生・健康法の根本。腰は曲げない、膝を曲げる。腰をすえて能役者のように歩くのが腰痛に良い。一週間のうちに一日くらいは、食べない日があってもいい。

3）なくせないストレスなら､耐性をつけよう。ストレスはよい刺激と受けとめる。人生とは苦しみの連続であると覚悟する。

4）清潔すぎは病気であり、免疫力が落ちる。髪の洗いすぎは、髪が薄くなる原因になる。著者はチベットの山岳民族が髪を洗わない人が多いために、禿げ頭の人が殆どいないことに学び、著者も春夏秋冬に４回洗うだけと言う。

5）できるだけ体を冷やさない。冷房が強いときには首を温める。

6）自分の健康は自分で守る。健康診断は受けない著者、手遅れを覚悟している。手術によって、リンパ管や神経だけでなく、目に見えない気道も断たれる。

7）菊池寛賞を受賞した近藤誠さんは、近代医学の常識に疑問を投げかけた。科学療法は問題、抗ガン剤を使うなと。現代はあまりにも病院や医師に頼りすぎ。健康はすべて自己責任である。

8）個性と普遍性のあいだの、自分らしい選択を。血圧も人さまざまである。上が160から180でも平気だが､国の基準は160から130にも下がった。血圧の薬を服用している人は多いが、薬には副作用（毒性）がある。

9）アンチエイジングなどというが、老化は自然現象。もの忘れは健康によい。エンジョイ・エイジングで加齢を楽しむ。諦めるは「明らかに究める」と理解する。自力をあきらめ、他力にまかせる。心身一如、体は心の状態を映し、心は体のありようを反映する。

ニチメン大阪社友会　平成25年度総会・懇親会報告
(2013・9・12)

編集部（大阪のHPより抜粋）

平成25年度総会・懇親会は、例年どおり太閤園にて行われ、双日よりの来賓11名を含め約140名が参加して、下記式次第（当日配布）どおり、盛大に行われました。懇親会も例年のように、写真に見られるとおり、旧交を温めるにぎやかで楽しい会となりました。ご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

［総会開会］　11：30

① 開会宣言（進行役：関岡大吉世話人代表）
② 黙祷
③ 会員動静の報告
④ 平成25年度役員選任
⑤ 林　靖会長　挨拶
⑥ 議 事 ：
　1. 平成24年度事業報告（関岡世話人代表）
　2. 平成24年度事業決算報告（金谷経理部長）
　3. 平成24年度資産状況報告（　同上　）
　4. 平成25年度事業計画（関岡世話人代表）
　5. 平成25年度事業予算（　同上　）
⑦ 来賓挨拶：双日㈱　茂木良夫代表取締役専務
⑧ 連絡事項
　イ. 新年互礼会の予定
　ロ. 東日本震災への寄付募金結果報告
　ハ. イベントの案内
　ニ. その他のお知らせ

［懇親会］　12：00

① 開会　：（進行役：林喜久雄副会長）
② 乾杯　：（平岡貞治氏）
③ 中締め：（岡崎謙二副会長）

ニチメン大阪社友会
総会・懇親会風景

ニチメン湘南会ゴルフ会
―野村喜久雄さんの歓送会―

水　庫　博　夫

ゴルフと麻雀が何よりも好きな野村喜久雄さんがニチメン湘南会ゴルフを引退されることになりました。

そもそもこの会は相模の国の南、つまり相南即ち相模湾沿岸一帯に住むニチメンゴルファーを対象に大先輩の故安藤幸男きんを中心に機械部門の諸先輩が始めたのが発端で、昔の資料がないのではっきりしないが少なくとも25年以上前の昭和末期に遡りその活動ぷりは長谷川　洋さんにより当時の月刊ニチメンに紹介されたこともあります。

野村さんほ故安藤さんの後を継がれ長年に亘り物心両面の象徴としてニチメン湘南会を全面的に支えて来られると共にご自身もつい最近まで元気にプレーを楽しまれました。

今回引退されるに当たり会員一同からの感謝の気持ちを込めて11月18日（月）レインボーカントリー倶楽部での定例コンペの後で心ばかりの歓送会を催した次第です。

当日は好天にも恵まれ16名の70歳超の元若人が集い、歓送会は熱気あふれる交流の場と化し野村さんのユーモアあふれるお話で盛り上がりました。

因みに当湘南会は登録メムパー計22名でレインボーCC、富士平原CC、沼津CCを舞台に年三回の定例コンペを設ける中で野村さん拠出のファンドによる優勝者、準優勝者間の取り切り戦を行っておりますが年々参加者が減る傾向にあり草創期のメムパーは僅かとなりました。

この機会にもし参加にご興味ある方々が居られたら大歓迎であります。

後列左から　小平愛一郎　西田　稔　吉川秀夫　竹内可能　篠塚美郷　田所忠彦　井田正従　西村照男　熊谷信弘　杉江彰彦

前列左から　吉田孝生　河西良治　野村喜久雄　島崎京一　橋爪　覚　水庫博夫

第8回ニチメン機友会開催報告

佐　藤　鐵　雄

第8回ニチメン機友会（懇親会）を平成25年10月19日（土）に、八重洲富士屋ホテルにて開催しました。今年は旧ニチメン船舶部が当番幹事の役割を担いました。

約400名の方々に案内状を送付し、締め切り間際までに76名から参加表明を頂きましたが、その後キャンセルもあり最終的に69名のご出席を頂きました。特筆すべきは、大阪・神戸・名古屋からもご出席頂いており、心からお礼を申し上げます。
又本会は恒例となった通称“与儀マンドリンクラブ”（総勢21名のバンドメンバー）が加わり会は一層の盛り上がりと、和やかな雰囲気の中で進められました。

開会に先立ち参加者のグループ写真を撮り、直ぐに現像を手配、パーティー終了後全員にお渡しすることも出来るようにしました。

定刻正午に、元船舶部平口靖則当番幹事の総合司会で開会され、先ずこれまで1年の間に惜しくも鬼籍に入られた機械部門関係者5名に対し黙禱をささげ冥福をお祈り致しました。

続いて最初に石澤会長のご挨拶があり、入社当時の回顧を含め興味深い数々のエピソードをご披露頂きました。
続いて、昨年まで社友会会長でご活躍された河西良治さんにニチメン時代を偲び、且つ蘊蓄のあるお話しを頂きました。
この後、機友会朝倉常任幹事代表、高木総括補佐及び元船舶部の仲間からの推挙に応えて、僭越ながら小生が当番幹事の立場から、ご出席の皆様へのお礼の言葉を述べ、同時に乾杯の音頭をとらせて頂き、続いて歓談に入りました。

次に、これまで本機友会の準備の為何度も打合せを重ねてきた幹事役の船舶部関係者全員がステージに集合し、幹事を代表し双日マリーン アンド エンジニアリング㈱常務執行役員大曾根弘之さんに、ご出席の皆様へのお礼の挨拶と、同社が行っている世界規模での
総合船舶商内の現状説明をして貰いました。
続いて、大阪からご参加いただいた（ヤンマービジネスと言えばこの人）辻井さんにご挨拶を頂き、何時もの素晴しい話術で会場全体が大いに和みました。
次にニチメンの人事部や機械関係で19年間従事され、その後日立工機㈱に移られ、社長にご昇進後、会長も務められた鍵本孝三さんに、工夫と忍耐で成功に導いた商内作りの極意を披露して頂き、滅多に聞けない経験物語でもありました。
続いてニチメン機械部門出身で、中小企業診断士のライセンスを取得し、その後時代を先取りしたレジャー・アミューズメントの会社を設立し、弛まない追求心と努力の結果、
この分野で名のある会社に育て上げ、確固たる存在を築いた㈱ワック社長の栗橋 寿さんに、その歴史と現状をお話し頂き、ご出席の皆さんも大いに力を貰ったことと思います。

歓談が進み、何時しかバンド演奏をバックに上條さん・丸山さんの美声が会場いっぱいに
流れ、パーティーは弥が上にも一層盛り上がりました。

気が付くと、あっという間に刻限となり、朝倉常任幹事による中締めを行い、その後来年の当番幹事代表

として廣岡幹雄さんにご挨拶を頂き、定刻午後2時に会は無事終了致しました。

さて来年も機友会は同じころ開催されると思いますが、皆様にお会いすることを楽しみとし、同時に皆様の益々のご健勝とご多幸を祈念致します。

最後になりますが、統括責任者の高木亨一さん朝倉常任幹事他皆様に準備段階から大変お世話になり有難うございました。

改めて機友会の絆の強さに喜びを感じ、機友会の継続発展を願いつつ筆を納めます。

左から順に；沢村（旧姓鈴木）道子、 田中（旧姓竹中）与、
亀田（旧姓関戸）朋子、 増川恵子。

2013年10月19日開催　第8回機友会出席者　（五十音順敬称略）

朝倉重道	上條達雄	杉本幹雄	中谷宣英	本田務
池永宏	亀田朋子	杉本佳久	南部捷郎	牧洋生
石川信行	川西啓三	鈴木道子	西川周	増川恵子
石澤謙一	川西勲	高木亨一	西槙憲生	丸山修作
泉伸夫	木皿重正	田中与	野村喜久雄	水庫博夫
稲治寿	木寺厚二	辻井準一	橋爪覚	森江健二
今村隆夫	日下部百也	土田博	林正弘	山岸正雄
宇津木長	窪田厚三	殿岡敬久	林幹雄	山田寛治
大熊恭子	栗橋寿	豊間根政行	久本紘一	山邑陽一
大曽根弘之	黒河武司	永井存	平口靖則	与儀治
大野史郎	小寺大輔	中原正紀	廣岡幹雄	吉川秀夫
大羽陽一郎	小橋雅寛	中村静人	福富直明	吉弘ちよ
鍵本孝三	佐藤統次	中村雅春	古家章	吉本邦晴
河西良治	佐藤鐵雄	中村吉夫	星加恭	

第８回ニチメン機友会風景

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

ニチメン東京化工OB会
＜第23回懇親会＞

栗　田　久　彌

恒例のニチメン東京化工OB会が去る10月18日（金）18時より日本橋交差点脇の「レストラン東洋」で開催されました。
平成２年春に創設したこの会も中断する事なく毎年開催され今回で23回目を数えます。

本年の参加者は28名と往年の参加者と比べると半減しましたが、ニチメンが消失し双日が誕生した2003年４月から早や10年と６ヶ月が経過している現状に加え、会員の老齢化による不参加の増加と新規参入が見込めない現状を考えると、参加者の逓減は止むを得ない現象と受け止めざるを得ませんでした。（出状総数 111通）

とは言え、今年の懇親会も開宴直前から相変わらずの「ワイワイ、ガヤガヤ」、歓喜に満ちた化工OB会独特の雰囲気でスタート、お互いに旧交を温め合う有意義なひと時に移って行きました。

閉会予定時刻に至っても散会の雰囲気は全く見られず、レストラン側に１時間の時間延長の内諾を取った上、20時50分参加者全員の集合写真を撮り無事終宴・散会しました。
「化工OBは何時迄経っても相変わらず元気溌剌」を幹事が実感した一夜でした。

☆参加者名（アイウエオ順　敬称略）

浅子豊治	足立　宏	池田　格	岩上敦司	大野久生
大村健太郎	沖田隆彦	笠原聖子	勝田泰司	清田郁夫
栗田久彌	斉藤至弘	篠塚美郷	島崎京一	竹内可能
玉置宣宏	丹下　薫	滑川和子	西川　洋	浜田早苗
林　悟	前嶋美和	桝潟巌夫	箕作武彦	山邑陽一
吉海秀造	吉木　健	和田順一	以上　28名	

幹事連絡先

合成樹脂関係：吉　木　　健
電　　話：03－3421－9497
E-mail：　yoshiki@fb3.so-net.ne.jp

化学品関係：　栗　田　久　彌
電　　話：　048－473－3339
E-mail：　kurita138@jcom.home.ne.jp

俳句の会「いろは句会」

塚　本　幸　雄

一　句会の経緯

「いろは句会」は平成元年１月に発足し以来25年間　今年の11月で第288回を迎えることになりますので社友会の数多のOB会の中でも長寿を誇ることになりました

二　前回に続き会員の発表句を下記にご披露致します

夏大根おろしが制す青魚　（宇治田　薫）
新涼や辿り着きたる大欅
バリバリと迫る落雷大渋滞　（大田　琢也）
はしゃぐなと父の一言大花火
村落の道路失せたる秋出水　（久保田悦子）
朝まだき野菜とる手に露しとど
海苔割れる音コンビニのにぎりめし　（三枝　一希）
包丁の刃より滴る梨の汁
絵馬堂の軒に爪立て蝉の殻　（笹原　　弘）
秋晴や岩に座し剥く黒玉子
石段の木洩れ日揺るる夏木立　（下川　泰子）
草陰に身の失せし殻蝸牛
蜘蛛の囲の上る日輪捉えけり　（塚本　幸雄）
新涼の風纏いつつ山下る
初蝶は風の高さにさまよへり　（福島　有恒）
新茶汲みいつか一人となる話
居待月湯屋の天窓今宵きり　（藤野　徳子）
急かさるるやうに鳴きをり秋の蝉
参道で客呼ぶ女将うなぎ店　（若月　義和）
煽られて渦巻く落葉皇居前

三　会員の集合写真

今年の８月の全員写真です

前列左より　塚本幸雄　大田琢也　宇治田薫　藤野徳子　久保田悦子
後列左より　下川泰子　三枝一希　福島有恒　若月義和　笹原　弘　　以上

ニチメン昭和31年度入社同期会
H･25･10･23

橋　爪　　覚

平成25年10月23日12時30分に日本橋室町の砂場で昭和31年度入社同期会が、幹事役の橋爪の開会の挨拶と乾杯の音頭で始まりました。今年の出席者は12名でした。敗戦でどん底に落ちた日本は、その後約10数年の間に朝鮮動乱などによる特需景気の恩恵を受けて経済が活況を呈したが、ニチメンも先行きの経済成長を見込んで、業容拡大するため、昭和31年度は東京支店に約35名の新入社員が採用配属されました。

入社後は高度経済成長の追い風の中で、夜遅くまでの残業もいとわず無我夢中で仕事に打ち込んだ張り合いある日々を過ごした思い出があります。しかし好調は長続きせず、景気は低迷して、ニチメンも無配に追い込まれ、TES運動や交際費切りつめなどの経費削減運動が強力に実施される苦しい時代もあり、ニチメンの栄枯盛衰を身をもって体験しました。事務所は室町の近三ビルから宝町ビル、日本橋ビルなどに移り10年、20年と年月を重ねるうちに、ニチメンは次第に世界的規模の総合商社に成長していきました。
我々も、国内外でJapan as No.1と言われた時代の仕事の一端を担ったのだとサラリーマン人生冥利に尽きる思いで深く感謝の気持ちでいっぱいです。

同期会メンバーも、それぞれの部所でそれなりに責任ある立場で職責を果たしてきましたが、やがて定年を迎えるころとなり、誰言うともなく31年度東京ニチメン入社同期会を年に一回位のペースでやろうとの話がまとまり、第一回目は宝町本社で開催されました。
その後は年一回幹事持ち回りで、懐かしい近三ビルの近くのいずも屋、雲楼、砂場などで、主に秋の一日に昼食をとりながら2－3時間の情報交換と古き良き時代の思い出話などに花を咲かせております。当初多かった参加者も、物故者や体調不良の人、遠方へ移転した人などで参加できない人が多くなり、参加者が減ってきているのは淋しい限りです。
いっものことながら、苦楽を共にした同期入社の思い出話はいつ果てるともなく続き、本日も次から次へと懐かしい思い出話に、時間を忘れて話しが盛り上がり宴たけなわのところ、残念ながらお開きの時間がきてしまいました。そこで次回の幹事を決めて、幹事役の土屋の閉会の挨拶で皆元気に来年の再会を誓って散会いたしました。　（幹事：橋爪　覚・土屋秀雄）

なお出席者は下記写真の通りです。

前列左より；廣田静潤、宇治田薫、久保貞二、土屋秀雄、小林斉之介
後列左より；西村弘、島崎京一、糸井康雄、佐藤郁夫、丹野栄、橋爪覚（撮影後参加：金澤英雄）

「39会」の仲間たち

中　谷　宣　英

昭和39年４月、日綿実業に入社した同期の懇親会がいつ頃から始まったか定かではないが、我々40歳代の初め頃にはもう行っていたので、少なくとも30年以上続いているのは間違いない。

現在の39会・会員名簿によれば、33名が会員となっており、最近の10年近くは相原正和君・岩橋宣之君が世話役として献身的に運営に当たってくれており、私がそれを補佐する形をとっている。

もう全員70歳を若干過ぎているが、まだまだ企業の第一線で経営に当たっている方、自営業で頑張っている方、勉学・教養に磨きをかける方、趣味の世界に没頭の方、病気療養中の方、平々凡々浮世に身を任せる方等さまざまながら、毎年11月下旬の懇親会には、20名を越える同期生が馳せ参じてくれる。

今年（平成25年）も例年のごとく懇親会を11月22日、いつもの有楽町駅前にある「日本外国特派員協会」（著名人の講演などが、良くテレビで放映される所）内の一室に同期生23名が集まり、和気藹々の雰囲気の中、開催された。
残念なことに、ここ数年は物故者が相次ぎ、この1年で森田清市さん、窪田良俊さんを失い、懇親会は先ず「黙祷」で、故人となった旧友への哀悼の意を表すことから始まった。

司会進行係を務める相原世話役の開会の辞で始まり、曽我君の音頭による乾杯でパーテイがスタート。ワイワイガヤガヤと歓談の輪が大きく広がる・・・。
30分程歓談のあと、有志の近況報告に入る。

司会役の指名により石井・木下・園山・佐藤・斉藤・中島・中村・岡田・他諸兄のスピーチ。一例として大坪君の近況報告:「昨年自転車に乗っているとき、崖から滑り落ち頭を強打、失神した。たまたま通り掛かった人が気がつき、直ぐに救急車を呼んでくれ病院に運び込まれた。頭を手術し数か月の療養、何とか普通の生活に戻れた。但し趣味の登山とスキーはもうできなくなった」。

岩橋世話役より、今日出席できなかった方々の動静、また闘病・療養中の方々の近況などの報告があり、併せ会計報告がなされた。同君曰く「39会財政逼迫の折、供花代も最早無いので、間違ってもあの世に行って貰っては困る」と。

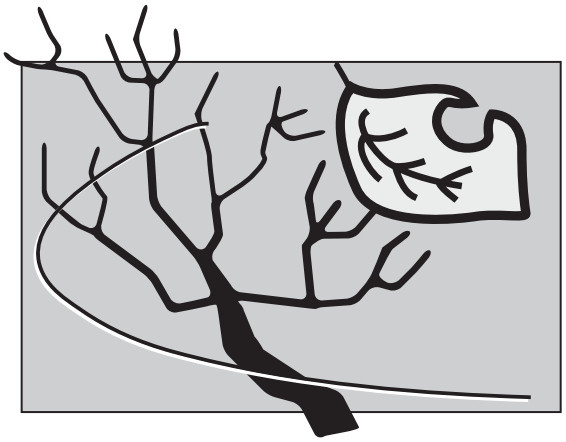
最後に私の閉会の挨拶、次いで安城君の音頭による「一本締め」で、2時間に及ぶ懐かしくも楽しい懇親会もお開きとなった。

来年（平成26年）は昭和39年入社以来丁度50周年という節目の年となり、
この半世紀にわたる絆を、友情を更に強固にし、11月27日（木）に同じ場所、同じ時間に懇親会を開く旨、中谷より発表した。来年は何とか一人の落伍者も出さずに、元気に再会出来る事を心より願っている。

今回の「39会懇親会」の出席者氏名：

安城　裕	石井光雄	磯貝英一	今田利征	漆崎隆司
大坪俊郎	岡田　茂	木下龍三	斉藤太紀雄	佐藤秀隆
曽我宏司	園山春一	玉置宣宏	寺田和夫	中島明彦
中村静人	中村博夫	平井亮三	福島光男	吉田紀一郎
相原正和	岩橋宣之	中谷宣英		

前列左より；吉田、玉置、安城、園山、佐藤、大坪、岩橋、中谷
後列左より；相原、中村（博）、石井、岡田、漆崎、福島、寺田、平井、曽我、斉藤、中島、中村（静）、今田、木下



ニチメン・ベトナム戦友会（チーラン会）

木　村　幸　史

1965年のアメリカ軍の本格的介入から、1975年４月のサイゴン陥落に至る、ベトナム戦争のもっとも激しかった約10年間、サイゴン（現ホーチミン）で苦労を共にした面々が家族を含め再会してはという話が持ち上がり、「ニチメン・ベトナム戦友会」を約40年の歳月を経て大阪で開催した。

会場の予約を取るのに、「ニチメン・ベトナム戦友会」では恰好が悪かろうということで、当時危険を避けるため駐在員が一か所に軒を連ねて居を構えていた、サイゴンのチーラン（芝蘭）地区の名前をとり「チーラン会」と命名。

この間オーバーラップして駐在していた、澤田太郎、木村幸史（夫妻）、塚本幸雄（夫妻）、

漆崎隆司（夫妻）、大平栗雄　各氏に加え、当時頻繁にサイゴンに出張で来られていた辻井準一氏の９名が、ニチメン社友会ご愛用の「太閤園」に10月22日正午に参集した。(体調不良の西尾敬一氏、鬼籍に入られた鳩貝寿夫、朝比奈茂夫　両氏の参加が見られなかったのは残念。)

40年ぶりに再会するメンバーもあったが、最年長87歳の澤田、辻井両氏から最年少70歳の大平氏まで年齢の差はあるものの、一気に昔に戻っての賑やかな会となった。

1968年１月末の旧正月、ベトコン（ベトナム解放戦線）がサイゴンを含むベトナム全土に大攻勢をかけた「テト攻勢」の際、家族と休暇旅行中の中部山岳地帯のダラットでベトコンの攻勢に遭遇、激しい戦闘で流れ弾がホテルの壁にぴしっぴしっと当る音、近くで放たれる迫撃砲や戦車砲におびえた二日間の後、交通、通信が完全に遮断され、孤立した山岳地帯の小さな街で３週間音信不通となった木村夫妻の回顧談。

警官の停止命令を無視して走り去るバイクの青年に、カービン銃で一斉射撃を加え、バイクもろとも吹き飛ばし即死させた、映画さながらの現場に居合わせた塚本氏の目撃談。

1975年４月サイゴン陥落の直前、飛行場が封鎖される前日に、街の辻ごとで検問する政府軍のベトナム兵に10ドルずつ賄賂を渡しながら、やっとのことで空港にたどり着き、手荷物一つでぎりぎりでサイゴンを離れることが出来た塚本、漆崎、大平　三氏のサイゴン脱出記

等々、今では信じがたいような思い出話の続出で５時間はアッという間に過ぎ去った。

後列左から　；　漆崎隆司、澤田太郎、辻井一準一、塚本幸雄、大平栗雄
前列左から　；　木村幸史、漆崎夫人、木村夫人、塚本夫人

人事部有志の会

藤　崎　恭　典

去る２月25日太閤園で人事部有志の会を開催しました。

昨年秋の大阪社友会懇親会で鍵本さん、芦村さん、村松さん、山地さん達との談笑の中で、昔の懐かしい仲間に会える機会があれば良いなとの話になり、私が暫定幹事を買って出ることになりました。長年の間に大阪人事部に在籍された方々は200数十人に上りますが、今回は昭和40年前後に在籍された方々を中心に名簿を整理して、67名の方々に案内を差し上げた結果、若くして逝かれた方が２名判明、また体調不良を訴える方々が思いの外多かったのですが、男性10名、女性19名の方々の参加を得て、懐かしくも愉快なひと時を持つことが出来ました。関東から３名、小豆島、九州から各１名と遠路はるばる参加願った方々には心から感謝致します。

多くの方々が40数年ぶりの再会とあって、料理もお酒もそっちのけで昔話に花が咲き,姿･形は長年の風雪を経て些か変わりましたが、気持ちは一気に40年前にタイムスリップしました。

今後毎年１回開催する事として、会長に鍵本さん、幹事団に村松さん、山地さん、橋本（典子）さん、藤崎の４名を選出、今後会員の枠を拡げて行くことにしました。

今回案内を差し上げずに失礼した方々にはお詫び申し上げます。昭和50年以降に入社された方々はまだ現役で仕事をされている場合が多いところから、今後原則として昭和49年以前に入社して大阪人事部に在籍された方々に勧誘の輪を拡げる予定です。

来年は２月９日（日）に開催する事にして開催場所の検討を行います。

ご意見、ご要望事項など幹事団にお寄せ願えれば幸甚です。

（　　）内は、旧姓

「後列」
藤崎恭典　廣岡松治郎　名和克己　神田久大　放岩卓志　鍵本孝三　芦村八郎　国武貞俊　山地正房　村松正司

「中央列」
藤井美津子（松浦）　竹内章子（澤井）　鬼束昭代（山田）　西田啓子（真水）　武井美智代　池田喜久子（青木）　重野織江（前塚）　橋本典子　浜内　緑（藤井）　山地有加子（山口）

「前列」
阿加井生子（藤原）　藤崎敬子（福岡）　米田洋子　木村千代子（笹崎）　森　正子　前田照代（森）　川島園枝（小林）　澤山　操（北村）　山口和子（豊田）

義巳さん。俺は無念だ。

丸　山　修　作

義巳さん。何故逝って仕舞ったのだ。昨年十月に大阪で食事を共にした時、次は今年の四月に京都で会おうと約束したではないか。私が三月に肺炎で入院して仕舞った為、その約束ほ実現出来なかった。退院后電話で話したね。一時間近くも話した。元気の良い張りのある声だった。「元気でいればいつでも会えるのだから、身体を大事にして元気でいてくれ」と言ってくれていた。貴方のその声が未だ鮮やかに耳に残っている。そして今年の秋に又会おうと約束をした。それなのに断りもなく何故逝って仕舞ったのか。

二人ほ誰もが認める刎頚の友であったり貴方は昭和二十五年四月に、そして私は同年十月に日綿実業に入社した。正に同期の桜だった。入社時は貴方は大阪の繊維、私は東京の機械。出会いは昭和二十九年、私がインドネシアのジャカルタに駐在してからの事であった。当時我社はイ政府から三万錘綿紡績工場を受注、建設工事中であった。私の主たる仕事は日本から派遣される錦紡績技師の世話であった。併せ新しい機械商いの開拓であったが、さっぱり機械の引合はなく、引合のあるのは繊維製品のみであった。繊維の知識の全くない門外漢の私も何もせず寝ている訳にも行かず、それこそ特務精神で我武者羅に片言のインドネシア語と筆談で事に当った。よくしたもので、その内ぽつぽつと契約も出来てきた。然し私には耳慣れないフジエットだのジョージェットなどの繊維製品を訳も分らずにバイヤーの求めに応じて引合を出す私の引合電報（ファックスもない時代で全て電報で処理した）には、大阪繊維部も面食らったであろう。然しそれをドカッと腰を据え処理してくれたのが義巳さんだった。後で知った事だが義巳さんは周りの同僚に、丸山の引合は出来るだけ受けてやろうと言ってくれていた由。ともかく売れに売れまくった。一年三ヶ月の駐在を終え帰国した時、当時の繊維部の牧野部長が、丸山を繊維に寄越せと時の機械の龍神部長に掛け合ってくれたとのこと。幸か不幸か私は繊維に移らず機械に残った。

私のジャカルタ駐在はその後短期間づつ三回に亘った。昭和三十五年インドネシア陸軍パラシュート落下塔の契約が出来、巴組の鉄骨を納入する事になった。その代金はスマトラ島からマレー半島に密輸され、マレー半島側で摘発されたココナツ油の代金を在シンガポール・インドネシア大使館で現金決済すると言うヤヤッコシイものだった。その目的でシンガポールに出張した際、偶々シンガポールに駐在していた義巳さんに初めて会った。会った瞬間から貴方とは肝胆相照らす仲になった。シンガポールでのココナツ油の代金決済は、義巳さんを始めとするシンガポール支店社員と東銀シンガポール支店の協力を得て無事終了した。

時は過ぎ二人共役員になった。或る日経営会議（確か常務以上参画）で機械部門の一案件につき、議長の日比野社長と真向から意見対立した。多少感情的になった面もあり、失礼な言語を吐いたのかもしれない。割って入ったのが義巳さんだった。機械本部の立場を充分理解し、私の主張する点を総体的に説明し弁護に立ってくれた。涙の出る程嬉しかった。自分にとり何の得にもならず寧ろマイナスになるかも知れない事を、よくぞこの迄言ってくれた。会議終了後堀内常務から、社長に一寸詫びを入れておいた方がいいんじゃないかと電話でアドバイスしてくれた。しようと思ったが直ぐ忘れて仕舞って詫びは入れなかった。

人生色々あるでしょうが、人の出会いそして人の相性というもの、摩訶不思議なものだ。

半世紀以上に亘り兄の様に慕える友を得たことは私の最高の宝です。ご冥福を祈ります。

合掌。

【編集後記】

まもなく2014年を迎える。時の流れに身を任せていたら、また馬齢を重ねることになった。
“As Time Goes By”は、米国映画“カサブランカ”（イングリッド･バーグマンとハンフリー･ボガード主演）の中に流れてきた曲でもある。

かつて日経新聞文化欄で、As time goes by は、“時の流れのままに”の訳よりも“時は過ぎ行くとも”の方が適訳だとの論文が載ったことがある。

そうだ、時は過ぎ行くとも、往時、ニチメンの旗の下で、ともに働き、苦楽をともにした仲間は貴重だ。夫々の分野で時には苦汁を味わったことも有るかもしれないが、総じて、楽しいエキサイティングな商社マン生活だったと思う。多くの出会いと別れも伴ったが。それも人生。

会報今号では、ニチメン・・・年会という同期会の寄稿文が多く寄せられた。
昭和31年組、39年組は新登場だ。懐かしい方々の写真を眺めて、夫々の方々との思い出に耽る。

同期会ではないが、目下すっかり脚光を浴びているベトナム国。そこで戦火のベトナム戦争の最中に駐在したニチメン・サイゴン支店の有志の会、まさに戦友会が、過日、大阪で催された。

大阪の木村幸史さんが寄稿してくれた。ヤンマー商いの牙城でもあった。企業戦士の今をご覧下さい。

又、今回は寄稿文に力作が多くて幸いでした。大先輩、三分一克美さんの『読書』三昧の生活ぶり、その読破した本のリストを見て、感服しました。老いて尚且つ旺盛な知的好奇心は長生きのもと。ゲーテの言葉に、“読書は新しい知人を得るに等しい”とある。

天皇、皇后が訪問したばかりのインドに関する諸情報；インド雑感－４、（高尾勝さん）も大変興味深い。

最後になりましたが故田中義巳元社長・会長の“追悼文”を丸山修作さんにご寄稿いただきました。
格調の高い追悼文で、ありし日の田中義巳さんのお人柄が偲ばれます。

明けて１月17日、双日本社（霞ヶ関・飯野ビル）で、恒例の社友会“新年会”を催します。
Ｐ－３－、－４－をご参照の上、是非とも賀詞交歓会にご参加ください。

（長谷川　洋）

ニチメン東京社友会

〒100－8691　東京都千代田区内幸町２－１－１
飯野ビルディング17Ｆ

発　行　人　；倉又　則夫　代表世話人
編集責任者　；長谷川　洋　世話人
アドバイザリー・スタッフ；倉持　次雄　世話人
竹内　可能　世話人
園山　春一　世話人
印　刷　所　；㈲　関　内　印　刷